

9613

海外協力の 現場から

マラウイ編

青年海外協力隊員の
記録

昭和55年3月



国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY



1064452[4]

國樂協力事務部	
受入 月日 '84.5.24 8	5/8
	36
登録No. 07396	JVP

序にかえて

昭和55年3月

青年海外協力隊
事務局 長 黒河内 康

ここに、青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ、協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと、日ごろから協力隊事業に深い関心を示され、ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは、私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は、開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの“お手伝い”が目的である。時には、お手伝いでなく、自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし、事情が許せば、それを排除するまでもない。しかし、多くの場合、「代位」ではなく「介助」であり、もどかしさはもちろんのことだが、いろいろ屈折した感情が累積することもある。

その中で、より一層、途上国の人びとの中に融けこもうとし、協力手法を改善充実しようと悩み、工夫している過程から生まれた報告書は、貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん、書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは、そうした数多い隊員の報告書の、ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。統編にその補充を期待したいと思うが、読者各位におかれては、この報告書集を手がかりに、協力隊員の活動の間口と奥行きが大きく、かつ多様なることを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は、水準が高いだけでも十分でないし、日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて、途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachersとして、あるいは trainer of trainersとして活躍できるよりは、1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに、南北問題のむずかしさがある、と感じとっていただければ幸甚である。

この報告書集では、関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただき、隊員(OB)の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろんだが、これから協力隊に参加しようとする青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

マラウイ編

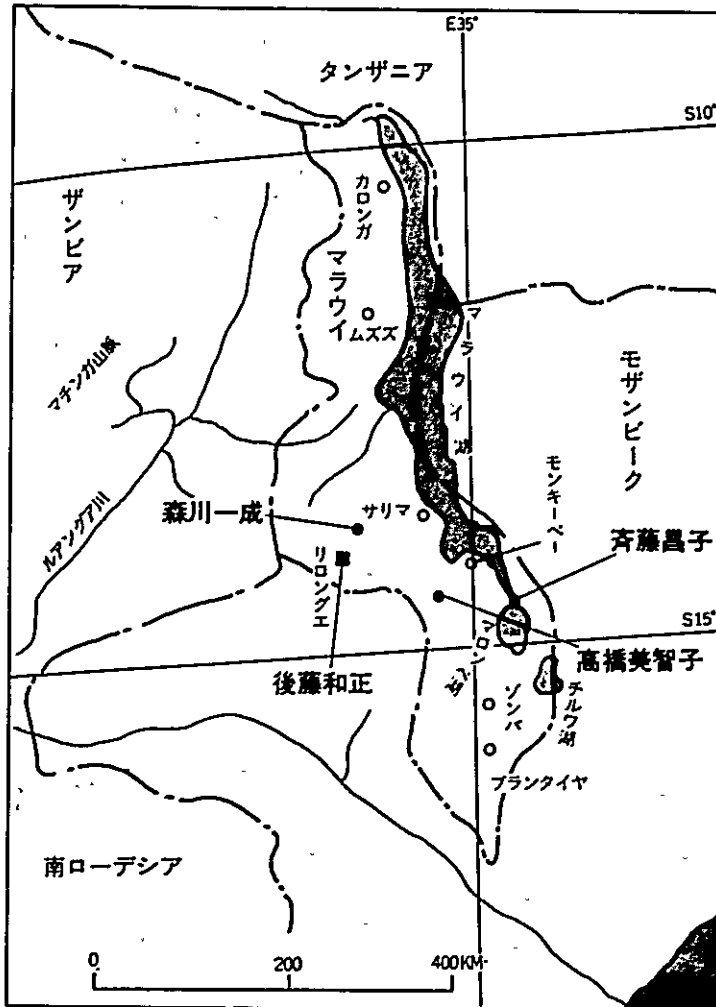
目 次

序にかえて	黒河内 康	(1)
I “素人教師”が賭けた実りある2年半	森川 一成	(5)
日本に帰って考えること	森川 一成	(12)
森川隊員の報告書を読んで	沢田 和佐 伊藤 信隆	(19)
II Secondary School の学生生活	高橋美智子	(29)
忘れ得ぬマラウイの人々	高橋美智子	(38)
高橋隊員の報告書を読んで	沢田 和佐	(41)
III 5歳以下児の予防接種キャンペーン	斉藤 昌子	(49)
日本に帰って考えること	斉藤 昌子	(48)
斉藤隊員の報告書を読んで	森 まさ子	(53)
IV 中堅土木技術者の育成を願いつつ	後藤 和正	(55)
今、協力活動について考えること	後藤 和正	(65)
後藤隊員の報告書を読んで	坂本 健次	(70)
あとがき	高橋 成雄	(72)
(付) マラウイと協力隊		(2)
マラウイの地図と概要		(3)

マラウイと協力隊（昭和55年3月1日現在）

最初の隊員派遣：昭和46年8月								
職種部門	農林水産	製 造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合 計
派遣中	7	1	27	15	28 (26)	5 (2)	18 (3)	101 (31)
実績 (累計)	20 (1)	3	59	57 (1)	55 (53)	10 (4)	39 (9)	243 (68)

(注) カッコ内は女性隊員。



マラウイ共和国概要

- 面積：118,484平方キロメートル（日本の0.3倍）
- 人口：553万人（77年中央国連推計，人口密度：46.7人/km²）
- 宗教：部族宗教，キリスト教（100万人），イスラム教（50万人），ヒンズー教
- 公用語：英語，チチェワ語
- 1人当たりの国民所得：150ドル（75年国連推計，日本4,937ドル 76年）
- 通貨：クワチャ，1クワチャ=1.20米ドル（78年央）1クワチャ=約210円
- 首都：リロングウェ（102,924人，77年）
- 元首：ヘースチングス・バンダ終身大統領
- 主な産物：綿花，落花生，タバコ，トウモロコシ，茶，米



“素人教師”が賭けた実りある2年半

総合報告書(51年3月~53年7月)

53年7月8日記

派遣国 マラウイ 50年2次前期組
職 種 理数科教師
氏 名 森川 一成
配属先 Robert Blake Secondary
School, Dowa

森川隊員の略歴

氏 名 森川 一成
生年月日 昭和24年5月5日
出身 県 島根県
職 種 理数科教師
派遣期間 51年2月~53年7月

一言で私の2年間を言い現わすなら“ひと夏のできごと”とでもいえそうである。今になってみれば、ここに来たのが昨日の事のように、脳裏にありありと総てが映しだされるのである。あまりにも鮮明な為。

苦しいこともあったように記憶するのであるが、人間の頭は実にうまくできていて、辛かったことに限って次から次へと忘れて、今では総てがバラ色につつまれているといっても過言ではない。苦しかったことを一つ一つあげてみてもどうしようもないのであるが、日本では感じる事のできなかったらうことを書いてみたい。

I “水”

あまりにも無頓着だったと思う。ここへくるまでは、水は蛇口をひねるとすぐ出てくる、という考えの中に育ってきた私だったのである。

そして水は無色透明の代名詞のように頭の中にありほんの少しでも異物が混入していれば、汚い水として絶対口にすることすらしなかったのである。ところが、まず水との第一の出会いには現地訓練と称し、2週間余り、ある村(日本の町と比較して)の高校のマラウイ人の先生の家で寝泊まりした時のことである。

朝顔を洗おうとして蛇口をひねったら出てきた水は、いろいろな小さなゴミが混在しているではないか。これは、パイプのどこかに溜っていたものだろうと思い、栓を抜き、その水を捨てて、新たにまた水を出したら、全く同じようにゴミが出てくるではないか。ここの主人は別に汚い水が出てくると私に言わなかったところを見ると、これが通常の水なんだろうと思い、一大決心をして、目を堅く閉じて顔を洗ったのである。洗った後で鏡を見て、顔にゴミがついていないかと確かめたのであるが、別に何の変化もないのである。その後何くわぬ顔をして朝食についたのである。

そうして2、3日過ぎた日のことである。水が出なくなったので、どうしたのかと尋ねたら“water problem”なのだと言う。ポンプの調子がおかしいのだろうと平然と構えているではないか。よく出なくなるのだという。出なくなれば、近くの湧き水まで汲みに行くのだという。ポンプが悪くなったところで、電話一本で、すぐ修理にくるような所ではないし、そんな人はまずいないのである。不平を言う相手がいないし、不平を言う習慣になっていないのである。耐え得る限り自給自足の手段を講じるのだろう。たくましいといえる生き方である。

こんなことも言っていた。雨季であったせいでもあるが、今に雨が降ってくるので心配はいらない、と（つまり天からの湧き水というわけだ）。

言うか言わないうちに、本当に、ザーと雷と共に氷まじりの雨がものすごい勢いで降ってきた。彼らは早速バケツ等、ありとあらゆる物を総動員して、雨集めにとりかかるのである。私は全く一人取り残された感じで茫然と見ていた。話には聞いていたが、実際、雨を台所等の水に使用するという直接的な行動に一種のカルチャーショックを受けたのだろう。

しかし考えてみれば、川の水をポンプで汲みあげ、それを浄化して供給する文明社会のシステムには、なんと無駄が多いのだろうと言える。

どちらにも一長一短はある。文明社会では水を心配する時間を何か他のことに有効に使えるわけである。しかし、ともすれば、その恩恵を忘れて、有効に使えるはずの時間さえも忘れて、無為に時を過ごすことの実に多いことか。彼らはまだまだ自然の中に密着して、その中で育てられて生きているという感じさえある。外見はともあれ、雨水を沸かしてみれば、つい先日顔を洗った水より、はるかにきれいなのである。なんだか雨水が非常に好きになった。

そうして、その夜のことである。お風呂を勧められ、入ろうとした。

幸か不幸か、雨が降ったために水道が出るようになり、蛇口をひねれば水が出てくるものの、それが真茶色の水なのだ。入ろうとしたものの、思わず立ちすくんでしまった。片足をつけただけでも、体全体が汚れてしまうような錯覚におちいったのである。しかし、せっかく沸かしてくれた水、こんなことで日本男児が遅れをとってはと、変な時に根性というか、やけくその精神が湧いてきて、いきなりザブンとつかった。つかってみると、どろの微粒子が体の回りでふわふわ。自分の体は、どこに何があるのかわからないほど、隠されてしまったのである。これなら外で入浴しても恥ずかしくはないわと、ほらをふきながら、入浴を済ましたのである。とうとう、その日は頭を洗髪する勇氣はでてこず、水がよりきれいになったら洗うことにして、日延べをしたのであるが、2、3日後には頭のかゆさに負けて、その茶色の水で洗うはめとなった。

人間は本当に弱い動物というか環境順応に早い動物で、4、5日もすれば、そのきたないと思っていた水も、何のことはない、一切匂しなくなった。

それからしばらくして散歩していたら、水源池とやらを見る機会があった。そこで見た水は、どろんこの水であった。これなら仕方のないことと、大

いに納得したのである。そして自分にいいかせたことは、水が少々汚れていたって、死ぬようなことはない。現に、ちゃんと人々は生きているではないか。図太く生きなくては、と心に誓って、その地を去った。

結局、その訓練が効を奏したのか、その後、任地に着いて、私の家で風呂に入る際、雨季ともなれば、どろんこの水、早い話がコーヒー色の水が出てくる時があるものの、全く何くわぬ顔をしていられるのである。ドロロンバックで肌がきめ細かになり、風呂あがりは美しくもなったような気分さえなれる。紅茶なんかを飲もうとする時は、入れる前にすでに紅茶色をしているといった有様で、そんな時は紅茶はやめにして、コーヒーを飲んだものだ。

ただ“水”というものを見る時、考える時でさえ、環境に作用され、こうも対処の方法が違うということは、人を理解したり、他民族の心を理解する為には現地の人々と生活を共にしなくては、とても理解は不可能であり、見方、価値観の違いが、相互にどれだけ偏見と誤解をもたらすかわからないと思うのである。

II “一三割る一三はプラス 1” (似非教師の思い出)

先生稼業を始めて 1 ヶ月目、ある学生が授業中に「一三割る一三はプラス 1 が、どうしてもわからない」という質問をした。そこで、「三割る三はプラス 1 はわかるか」と聞いたら、「それはわかる」と言う。

そのころはまだ私の英語も片言、いくら私の頭の中でわかっていても、それを相手の立場に立って説明するという余裕もなければ、どういう発想のもとにこういう質問をしているのかもわからない。うまく説明しようとすればするほど口ごもり、ますます単語が出てこなくなり、ついにはカッとなって、「Are you teasing me?」と血が頭に登り、真赤になって恥ずかしさまぎれに怒ってしまったのである。教室が水を打ったようにシーンとなった。あれほど怒るのはよそうと思っていたのだが、失敗してしまった。

その日の日記には、こう書いてある。

『……こちらが教えようと緊張すればするほど、相手も緊張して、ますますかたくなり、ますますわからなくなり、わかろうとする余裕がなくなってくるのである。私の誘導尋問にさえ、答えようとしなくなるし、考える意志まで減退してしまうのであろう。

耐えなければいけないのだ。理性を抑える力が弱くなっていたのであろう。というのも昨夜2, 3時間しか寝ていなかったのである(今日の授業の準備の為)。その興奮もそう長く続くものではない。シーンとなった教室に、私の理性もシーンとなったのか、徐々に冷静さを回復し始めるにつれ、背筋が冷たい。瞬間的に冷や汗をかいたのであった。今度は恥ずかしさ(つまらないことでカッとなった)が襲ってきた。生徒の顔を見るのも恥ずかしくなり、黒板に向かったまま落ち着けと何度となくつぶやいたものである。

その時は早く終りのベル(教いのゴング)が鳴ることを願った。

大人にならなくてはいけない。相手がわからないところを先回りして察知してやらなければならないのである。対等に知識のケンカをしても、こちらが勝つのは決まっているだろう。つまり、これが正しいのだという権限を最終的に持っているのは先生であり、生徒ではないという前提に立てば、何のことはない、教える立場という強みと余裕が出てくるものである。私には教える資格はないのかもしれない。でも認めてくれたJOCVという組織があるのだ。その組織は私をどこまで見透して合格通知を与えてくれたのかは疑わしい。しかし、何の経験もない私に町中で“バナナのたたき売り”をしろと命令し、私は現にそれを承諾してここまで来ているのである。決して後には引けない。もう船はとっくの昔に港を離れている。“バナナのたたき売り”をやってやろうではないか。数字、いや数の根本に立ち戻ろう。勉強、勉強である……」(1976年6月7日の日記より)

それから1年間というものは、手を変え品を変えて、つまり手品になるのかもしれないが、(冗談はさておいて)“バナナのたたき売り”を教室でしたような気がする。バナナを売るついでに自分自身をも時には売った。というのは黒板の前は私の花の舞台なのである。生徒はくいいような目で私の考えを吸収しようとしているのを私はしばしば感じた。もちろんそうでない時もあり、明らかに退屈しているなということも何度感じたことか。そんな時は、チラッと奥義なるもの(数学に関し)を見せびらかしたり、隠したりした。彼らのさらに学びたいという欲求を駆り立てるために、まるで私はストリッパーのような事をしているのではないかと、よく思ったものだ。先生たる者は総て、一回はストリップショーを見るべきだと信じて止まない。

また話が脱線してしまったが、私の教室は演劇でいえば舞台であり、一挙手一投足が、その役者の性格なり個性、気分を醸し出すのであろう。私が気分が悪い時は、どうしてもクラスが盛り上がらなかつたりする。たとえ私が

気分が悪くても、疲れていても、彼ら観客には一切関係のないことなのだ。入場してくれた者に対しては、笑顔で、演技で応えなければいけないのである。そして、おもしろいことには、自信がなくても自信ありげに教えると、不思議と彼らはずいてきた。しかし、間違っていることを正しいと言うのではない。たぶん正しいと思う時は、それを自信たっぷりに言うということである。ただしその後で常に確かめるという態度だけは、とりつづけたつもりだ。

時々間違っていたことに気づいて後で訂正したこともあったのだが、先生が自信をもてば、生徒の先生に対する信頼は増すものである。早い話が、先生は神格化されるのだろう。神となり始めると、その神の立場をやはり保たなければならないと感じ、ウィークデイは極力酒を断ち（酒好きの私がこうなったのは自分でも何の力かわからない）、精力をバナナのたたき売りに集中したつもりである。ところで酒の代わりに何かの代償なしでは、とてもやりきれないものである（白状すれば）。幸いかな、この学校にはテニスコートもあり、相手もいて、好きな時、汗でその代償を補ったのである。人間は何か一つばかなことをしなければ、持たなければだめだ、と今にして強く感じるのである。ここではそのばかなこととはテニスだった。

私の教室で、舞台上、バナナのたたき売りをした大根役者は、こうして今舞台を降りようとして、ハッと立ち止まる時、観客席から生徒は、

「先生本当に帰るのか」

「私達が嫌いなのか」

「マラウイが嫌いなのか」

と声をかける。

私は、これらの質問に（たとえそれがお世辞にしても）思わず胸が熱くなると同時に、返事に窮し、いつも同じ答えになる。

「君達もマラウイも大好きだ」

と答え、

「が、しかし、いつかは去らねばならない」

とひとり言を言うのである。

先生という職業はどんな結果になるかは、その場ではわからない。私は2年半という短い期間ではあったが、夢中に賭けてみた。生徒もその賭けに乗ったか乗らされたかはしらないけれど、ついてきた。最後にここきて“本当に良かった”という一言を結論にして私の報告書を終わる。

なお私の在任期間中の Record を総て提出したら、それは別の意味の総合報告書になったかもしれないが、読む人にとっては無味乾燥のものになることを懸念して、敢えて、短くはあるが型破りな報告書にした。

日本に帰って考えること

森川一成

仕事から帰って、協力隊事務局から送られてきた封筒を開け、自分の字、つまり2年半の任期を終了した直後の字を見て、くぎづけになってしまった。文章の内容についてくぎづけになったのではなく、ミミズのはったような字の1字1字に私の記憶が蘇ってきて、体験の主人公になりきってしまったのであった。文章にすれば、たった1行の出来事でも、その場所ならではのものがあり、何行もの説明を加える必要がないように思えたのが、私の読後感でした。原稿の稚拙な点は、これまた私そのものであって、直しようがありません。

私にとってマラウイの国が、いやマラウイの国で得、血となり肉となっただろうものは何であるかという、それは、キリスト教を通じた宗教の考えをもった生き方でした。マラウイでの出来事は、私にとっては忘れる事が出来ない夢だったのでした。私は、幸運にも子供を教育するという立場に置かれました。そして子供が、いかにしつけられて育ってきたのか、教育という問題と同時に彼らの血となり肉となっているものを探りつつ、自分の育ってきた母体について、考えさせられたのでした。

私は天罰について、何かわからない力に因る運命だと思って生きていました。しかし彼らには、必ず最終的にはキリスト教という神の仕業が天罰だということで、一つの畏怖するものがあることを知りました。そして親は、この偉大なる神の威光でもって、子供をしつけているのでした。人間が生まれ育ち、皆と協調して生きていく為の生活の知恵が宗教なのではないでしょうか。ところで私には、宗教と言えるものが、どこを探しても見つかりませんでした。

では、いかにして生きてきたのか、そして、いかにして子供を教える事ができるのだろうかという不安と疑問が、常に任期中、頭から離れませんでした。私は、生徒と何回となく神について論じ合ったのでした。決して一致には至らなかったけれど、かくあるべきだという結論は、いつも一つだったのです。

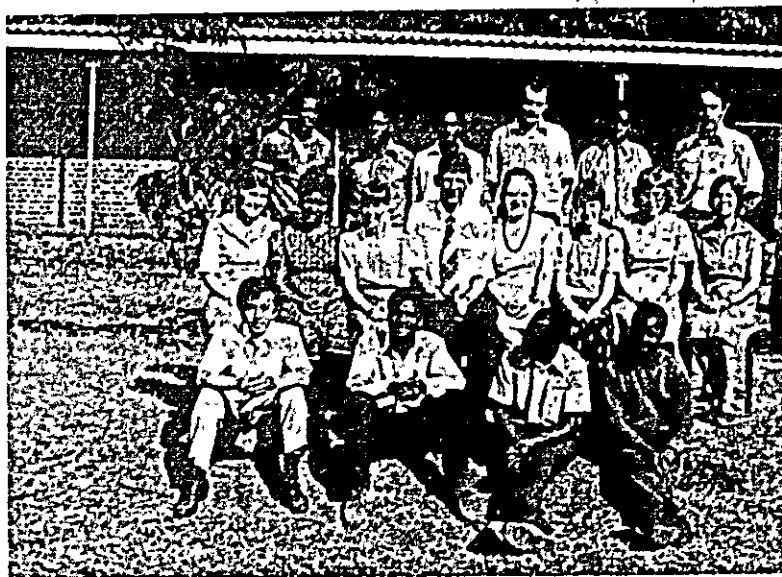
では、何故かくあるべきかという、一方は神（キリスト教の）が聖書の中で述べておられるといい、他方は、それが聖書に述べてあるのは知らなかった

けれど、それは昔から倫理とか、道徳といったもので、常識となっていることだと言うのでした。無論、後者の方が私なのですが、そんな時、私はよく一人で空を仰いで、自分自身にどうして聖書に書いてあることが否定できないのかという事実が、私には血となったのではと思われます。というのは、日本で平々凡々と生きていたら、報告書に述べたような環境におかれることもなく、考える機会すらなかつたらうと思われるのです。

この日本という社会で、歯車の一つとして生きていくのであれば、それでもいいのですが、私には、とても、それに耐えられないという実感が、今回、私自身の報告書を読んでしまいました。今また新たに自分の今後の生き方について立ち止まって考えることができたというのが私の所感です。



青空教室の授業風景。任地だった Dowa の
Robert Blake Secondary School で



マラウイ人教師と各国からのボランティアによって構成された教師陣

森川隊員の報告書を読んで

沢田和佐・伊藤信隆

まず森川一成隊員に「御苦労様でした」と申し上げる。

マラウイにおける報告書から、日本と自然、文化環境の異なる国における教育活動者としての苦闘のあとが読み取れる。特に興味深いことは、日常生活の「水」の問題から国際理解の基盤ともいえる文化理解、自然と人間とのかかわりの問題に触れている点である。この点について、第一に感想を述べることにする。

海外での協力者が発展途上国で当面する生活的ショックは、まず「水」の問題であるといっても過言ではない。隊員は生活を通して次の問題を発見している。

(1) 自然と文明の問題

自然の中で生活している現地人が日常生活で飲む水は褐色の水であり、隊員からみるとゴミ混在の汚水として映る。発展途上国によっては、現地の「水」によって、しばしば隊員が胃腸をこわしたり、時には細菌性の病気に感染したりすることさえある。現地人にとっては、天然の雨水も天の恵みとしての飲料水である。自然の中で生活する人々の知恵、行動様式をみて、あらためて文明社会の中での生活で失われたものが再認識され自覚されている。

(2) 生活と人間理解

「人を理解したり、他民族の心を理解するためには現地の人々と生活を共にしなくては、とても理解は不可能であり……」と報告書で述べられている。確かに生活にとって必要不可欠な「水」を通し、また現地の生活を通して、現地の人々の心がわかるとする主張は正しいと思う。さらに人間理解はその基盤としての文化的、歴史的背景をよく勉強して貰えば、国際人としても大きく成長することが約束されるであろう。このことを期待したい。

(3) 数学教育に関連する問題

1ヶ月目の授業で「-3割る-3はプラス1が、どうしてもわからない」という質問に出合って、片言の英語では相手の立場に立って説明することが出来

ず、思わずカッとなって「Are you teasing me ?」と頭に血がのぼって怒ったと正直に記しているが、この質問こそ、数学教育の基本について、生徒の本音を引き出した千載一遇の機会であるので、後述の日記にあるように、冷静に対処できるよう余裕をもつべきであろう。その余裕は、数学はもちろん、数学教育についても精通することから生まれる。「良く学ぶ者のみが良く教えることが出来る」ということを忘れないでほしい。数学と数学教育には同じ面が多いが、違った面も持っている。

(-3) ÷ (-3) = (+1) を例にとると、

A. 数学的に見て、正しい厳密な論理を展開すること、即ち、負数をどう定義し、除法(割る)という演算(加法、減法、乗法を定めておく必要がある)をどう定義するかという問題がある。このことの詳細については、「中学校 新しい数学教育(1968文部省)」を参照されたいが、自然数から出発して、自然数が、加法と乗法とに関して閉じているが、減法と除法に関しては閉じていないため、減法が自由にできるように、整数の集合($\dots -2, -1, 0, 1, 2, \dots$)が生まれ(ここで負数が登場する)、さらに除法について閉じるように集合を拡張して、有理数が生まれる。この時大切なことは、以前に定義された自然数、整数での演算に関する性質が成り立っているということである。このような準備のもとで $(-3) \div (-3) = (+1)$ を数学的に証明する問題に挑戦されては如何だろうか。

B. 生徒にどう説明すれば、生徒が納得し、理解するかということ(多少数学的にみて厳密さは欠くとしても)、即ち生徒が過去にどれだけの指導を受け、知識をもち、どの程度の理解をもっているかを確かめておかなければならない。いくら数学的に厳密な証明を展開しても、生徒の理解の程度をはるかに超えていては教育ではない。

(-3) について生徒はどう理解しているのか、割るという演算は生徒にとってどういうことなのか、一体いつどのように指導され、どの程度定着しているのか、これらの事が予めわかっていなければ、説明は出来ない。そのために次のような提案をしよう。

$$\textcircled{1} \quad 0 \times 3 = 0 \qquad \textcircled{2} \quad 3 \times 0 = 0$$

この二つを、小、中、高校生を各々対象にしたと仮定して、三つに分けて教育的説明を試みられたい。①は容易だが②は困難である。

隊員は日記の中で、数学の奥義(私は、そんなものがあるとは思えないが……)をちらつかせて学びたいという欲求を駆りたてようとしているが、

それも一つの方法である。しかし、それは興味づけに過ぎないので本物ではない。数学は一見不思議だと思えるようなことであっても一歩、一歩筋道をたどって考えていけば、誰でも到達でき、万人を納得させ得る論理をもっている。しかも、数学は美しいが冷たさを感じさせるものとして印象づけるのは教育的でない。もっと身近な人間のつくったものとして、受け止められるようにしたいものである。

教室が舞台であり、教師を役者になぞらえているのは面白い比喩である。役者が舞台での演技に生命をかけているように、教師たるものは教室での授業にそれぞれの真剣さと充分なりハースアルがほしい。

最後の結びでの「先生本当に帰るのか」「私達が嫌いなのか」と声をかけてくれる生徒の言葉に、森川隊員のマラウイでの成果が結晶されている気がして思わず感動を覚えた。（青年海外協力隊技術専門委員＝理数科教師）

Secondary School の学生生活

第2号報告書(52年5月~53年5月)

53年5月17日記

派遣国 マラウイ 51年2次前期組

職 種 理数科教師

氏 名 高橋 美智子

配属先 Balaka Secondary School,
Balaka

高橋隊員の略歴

氏 名 高橋 美智子

生年月日 昭和28年4月5日

出身県 埼玉県

職 種 理数科教師

派遣期間 52年4月~54年7月

アフリカでの1年間が瞬く間に過ぎてしまった。

今まで報告書らしいものも書かずに夢中で生活してきたが、残る1年間に有意義なものとするために、頭の整理と共に、一つの区切りをつける意味において、報告書をまとめてみた次第である。

今号は主に学校生活について生徒を中心に述べてみたい。

I 学 校 生 活

Balakaは2大都市BlantyreとLilongweの間、ややBlantyreよりに位置している。主要道路沿いにあり、しかもマラウイでのたった1本の鉄道が走っている交通都市である（といっても日本の交通都市を連想されると困る。都市といっても、ど田舎なのである）。

そのBalakaにあるBalaka Secondary Schoolが私の職場である。学校はGovernment SchoolとMission Schoolの2種類に大別されるが、Balaka Sec. SchoolはGovernmentで2/3の生徒が寄宿舎で寝食を共にしている。

1. 生徒の理解度

生徒数は約270名で、Form IとForm IIが2クラスずつ、Form IIIとForm IVが1クラスずつで教室は6室ある。現在Form IとForm IIの数学を受持っているが、私が来た当時、教師が6人しかいず、しかも数学の教師がいないという最悪の状態では、私はForm IからForm IVまで全クラスを教えなければならなかった。

その時のTime TableはStudy Period（自習時間）がやたらと多く、歴史の先生が数学を教えていたりするような状況で、生徒の数学の学力が極端に低いことは、初回のlessonで、すぐに察知できた。Scheme of workには明らかに教えたと記されている事柄を、全然理解していないのである。-3と-5ではどちらが大きいのか、という問に対して、自信に満ちた顔で-5と答えられたときには啞然としてしまったが、驚いていたのでははじまらない。気を取り直して、ちょうど3学期であったので、復習をすることにした。

簡単な説明のあと、例題や問題を与え、一応一人一人のノートを見て回る。理解できている生徒はほんの少数で、ほとんどの生徒がまるでダメなのである。そんな生徒に対しては、個人的にまさに手とり足とりという感じで教える。黒板で説明している時には、キョトンと狐につままれたよう

な顔をしていた子が、わかったといって目を輝かす。教師にとって喜びの瞬間である。やればできるのだ。とにかく syllabus に追いつくために土曜日や放課後、遅れている生徒たちを集めて復習を続けた。

2. 授業方法

さて新学年度の開始である。自分の思い通りに年間計画をたて、生徒を導いていける、と希望に満ちたスタートを切った。私の教え方は、新しい topic に対して、導入→説明→2, 3の例題を使っての説明→不明な点に対する質問の受付→そして練習問題を与える。採点を兼ねてノートを見て回る。その時に誤って理解している生徒や理解していない子に、再度説明するという pattern をとっている。授業中に全員に理解させるという方針である。

以前、授業時間以外に教えたことから生徒の中には「先生、時間を割いて教えて下さい」と頼みにくる生徒が跡を絶たない。しかし、今学年度は私が授業中に詳しく教えているのであるから、その授業中に理解できないということは集中して授業を受けていないと見做すことにした。一番重要なことは集中して授業を受けること。それから理解できない箇所は積極的に質問すること。自分の力で解いてみること。課題は自分で try しなくてはいけない。そのように学習すれば Sec. に入れた生徒は皆 intelligent なんだから理解できない筈はないと advice することになっている。

3. 数学における問題点

Balaka は暑いせいもあるが、午前中はまだしも、午後になると机にへばり着くようにだらけてしまう生徒が多い。Day dreaming をしている生徒、おしゃべりをしている生徒、居眠りをしている生徒もいる。そんな mood の中で嫌いな学科を勉強するというのは、彼らにとっても辛いに違いない。が、教える立場にある者にとって、それを目のあたりに見ることはもっとも辛い。

数学の教師の一番の課題は、彼らから数学に対する偏見を除去することではないだろうか。マラウイの生徒たちがもつ偏見とは、数学は非常に難儀なものであると頭から信じ込んでいることである。特に、それは女子において顕著である（日本でも女性は理数系科目に弱いという見方が存在するが）。生徒は「女子は理数系が不得意なのに、どうして先生は女性でありながら数学を勉強したのか」と私に問うのである。「なぜ女子は理数系が不得意なのか」と尋ねると、「女子は遊び好きで怠け者だから」という

答が帰ってくる。「日本では一般に女子の方が真面目で、宿題を忘れてくるのは男子が多いのよ」と冗談半分にいうのを目を白黒させて聞いている。

彼らが数学を苦手とする原因をもう少し探してみよう。教育制度はイギリス式で 8, 4, (3) 制である。4 に当る部分が Secondary School 時代である。Primary School の 8 年間で Arithmetic を勉強する。

そして Secondary に来て、年数からすると日本の中学 3 年生にあたることになるが、その時にはじめて Geometry と Algebra という科目に遭遇するわけである。Algebra では数字以外の文字の出現にまごつき、Geometry で図形の出現に驚かされる。彼らにとっては大きな impact であろう。この時期が Algebra と Geometry に興味を抱かせ、その興味を持続させるか、あるいは驚かして、難しい科目だと諦めさせるかの分岐点である。

できれば、文部省に対して Primary の syllabus に Algebra と Geometry のごく基礎的なことを採り入れるように提案したい。

次にあげられる点は教材の不足である。教科書は学校の storeroom に保管されており、学期毎に生徒に貸与する。教科書には nos. が記されており、form に自分の名前、教科書の title, number を記入して提出する。無くした場合には、弁償しなければならない。この system は非常に結構なことである。しかし、それは教科書数が十分にある場合のみにおいてである。これは学校によりけりであるが、Balaka Sec. School は数学の教科書が絶対的に少ない。Form N, Form III は二人に 1 冊、Form II は 3 人に 1 冊、Form I にいたっては 40 名の生徒にたった 7 冊という貧困さである。

そんな状態で予習復習がまともにはできない。数学は他の科目と違って読んだだけでは十分でない。理解した上で practice をしなければマスターできない科目である。速く簡潔に問題を解くことが要求されている。日本では各種の練習問題集が与えられ、生徒はそれを一生懸命こなしているが、ここではそれができない。各クラスに 7 冊の教科書という Form I の授業では説明から例題、宿題にいたるまで全部板書しなければならない。これは時間の loss 以外の何物でもない。

生徒はコピーするのに一生懸命で、考える時間がますます削減される。さらに教科書の内容について言えば、古いタイプのイギリスの教科書をいまだに使っている。日本のように syllabus に合わせて教科書が作られて

いるわけではない(もっともこれは数学に限ったことのようにあるが)。内容はかなりむずかしいもの、syllabusに含まれていないものが多い。topicsは教師が選んで教えるわけであるが、これもまた非効率なことである(この点night schoolの生徒のために作られているテキストは非常によくまとまっている)。

三番目にあげられることは数学の有用性に対する彼らの認識不足である。彼らにとって英語は必須科目である。ザンビア、モザンビーク、タンザニアをボーダーとしている以上、英語は不可欠な言葉である。授業も全科目英語で行なわれているのであるから、生徒は英語をよく勉強する。農業国であるからAgricultureも皆よく勉強する。

彼らの意識の中にしばしば合理性を見出して驚くのであるが、生徒はこんなことを言う。「Arithmeticは日常生活に不可欠。しかし、Algebraはほとんど使うことがない。ましてやGeometryのtheoremや証明が何の役に立つか」。そう言われると、私も考えてしまう。

日本の指導要領にある総括的目標「事象を数学的に捉え、論理的に考え、総合的、発展的に考察し処理する能力と態度を育成し、また社会において数学の果たす役割について認識させる」などということの説明したところで、良い具体例も浮かんでこないし、彼らはピンとこないであろう。

日本の指導要領の具体的目標の第四にあげられている「事象の考察に際して適切な見通しをもち、抽象化し、論理的に思考する能力を伸ばすとともに、目的に応じて結果を検討し、処理する態度を養う」という目標が、彼らにとって一番要求されていることではないかと思う。まさに事象の考察に際して必要な観点から事象を理想化したり、抽象化したりして概念を構成し、これによって論理的に思考を進めるのが、数学の特徴である。直観が論理を進めていくうえに大切であるとともに、論理によって直観がより高次のものへと高められていくことも見のがしてはならない。

すなわち論理と直観とが表裏一体となり、互いに助け合って数学の学習が展開されていくのだ。彼らの暗記力はすこぶるよい。それは英語において証明されているであろう。他の国の語学を学ぼうとする意欲も大である(フランス語、ポルトガル語etc.)。しかし、Geometryの証明の時、どのように結論を導くか、誰も彼も顔をしかめてno ideaとgive upしてしまうのである。そして、私の証明を聞きながら、まるで魔法でも見ているように感心している生徒たち。数学に対するsence,直観力のなさ

に時々イライラするのであるが、それはPrimaryでの基礎がないということに集約されるだろう。

4. 数学クラブ

我が校には、chess, draft, drama, debating, exploring mathematicsと、七つのクラブがある。それぞれにクラブ活動は盛んに行なわれているようである。

私は自動的に(もちろん内心ぜひやりたいと思っていたのであるが)数学クラブの顧問となった。初回のmeetingの時、1教室に溢れんばかりのクラブ入会希望者を見て、我がクラブの希望者は少ないであろうと予想していただけに、びっくりしたと同時に嬉しく思った。本当に、こんなに多数の生徒が数学に興味を抱いていたのであろうか。

はじめに、数学クラブではどんなことをやりたいかという意見を求めてみた。「数学とはどういう学問かを知りたい」、「数学的なクイズをやりたい」、「どうしたら数学に強くなるのか知りたい」、「Geometryをやりたい」、「Algebraをやりたい」、「みんなで旅行したい」、「ダンスパーティをやりたい」等々、様々であった。苦手の数学を何とかして克服しようとする生徒、クラブを授業の延長のように考えている生徒、レクリエーションとしてクラブを位置付ける生徒、クラブは生徒が運営していくもの。そう、彼らのやりたいようにやらせてあげればよい、と私は思った。

一回目は同じ学校の数学の先生のspeech「数学パズル」。考えている数字を当ててみせたり、誕生日の曜日当てたりという内容のもので、生徒たちは興味を示した。

二回目は、Bibleの先生によるspeech「クリスチャンの数学」。

三回目からは、生徒たちが自主的にやるようにと思って、彼らに任せてみた。彼らはmemberの中からlecturerを選んで、彼らなりにやっている。その内容は、たいしたことないのであるが、彼らが進んで数学というものに取り組んでいく姿を一つの進歩の現われとして見守っている。

5. パニッシュメント

日本の教育法規によれば、「校長及び教員は教育上必要があると認める時は監督庁の定めるところにより、学生、生徒及び児童に懲戒を加えることができる。しかし校長及び教員が児童に懲戒を加えるにあたっては、児童等の心身の発達に応ずる等、教育上必要な配慮をしなければならない。

懲戒のうち退学、停学、訓告の処分は校長が行なう」となかなか難しい。

マラウイのSec. SchoolのRegulationでは夜中に寄宿舎を抜け出して町を歩いていたたり、酒に酔っていたり、女の家泊りに行ったりなどすると、寄宿舎からの追放、停学、退学などの重罰である。遅刻、making noise、宿題忘れ、sports activityへの不参加、制服不着用などの場合、軽いpunishmentが与えられる。草刈、除草、トイレの清掃が一般である。1時間から1週間にわたるまでmisbehaviorの内容によってさまざまである。これは疲労を伴うから、日本では体罰にあたることになる。

さて、この体罰は問題が多い。まず、このpunishmentが授業中に行なわれることが度々あること。それも他の時間のmisbehaviorによるpunishmentが、私の数学の時間に影響して、生徒は授業を受けられなくなってしまうのである。悪い行ないをしたのだから仕方ないといえば、それまでであるが、数学の授業と無関係であるのに生徒がpunishmentに呼ばれるという事実が驚かされたり、腹が立ったりである。punishmentは放課後か、土曜日に限ったかどうかと提案したことがあるが、その対象となる生徒があまりにも多く、まとめてやると、草刈鎌や蹴不足で十分に効果があげられないという理由で採用されなかった。

次の問題点はpunishmentの効果である。汗を流して仕事をしている生徒に聞いてみる。「何をやらかしたの」、「学校に遅れて来ました」、「それはまずかったわね」、「僕の家は学校からとても離れているんだから仕方ないんです」、「遅かったら遅刻しないように早く起きなくてはダメでしょ」、「今朝は曇っていたんで、時間になったのに気が付かず寝坊してしまっただけです」という具合で、全然反省していないばかりか、punishmentは心外だといわんばかり。結局、彼らは体罰を恐れているだけで、何ら反省をしていないのである。

同僚の先生にあんな反省もしないようなpunishmentは無駄だと言ったことがあるが、「他に何ができると思いますか」と逆に聞き返された。なるほど他の方法はと問われれば何も名案はない。特に一番厳しい校長先生の不在の日は、学校がいつもより騒がしくなるという事実が存在している。日本では反省を促すお説教に重きをおくとしか答えられなかった。本心に自分の非を認めて反省するということは、どんな人間にとっても難しいことであるが、少なくとも、はじめに、まずI'm sorryとあやま

り、それから理由をあげるぐらいの謙虚さをもってもらいたい。

punishment を与える教師の方にも問題は多い。乾期の時のことであった。見渡す限り薄茶色の世界で草なんか全然見当らない。さて punishment は何になるのかなと思っていると、校長は生徒に穴掘りを命じた「1ヤード掘りなさい」。ゴミ溜でも作らせるのかしら、それにしても場所がよくないけれど、と思っていると、次の週 punishment はその穴を埋めることであった。全くの笑い話である。punishment のための仕事ではなく、もう少し創造的な仕事を与えるべきである。そして、もちろん、言われなくても十分にわかっている年齢ではあるが、人間は、何をやるべきか、何をやるべきでないのか、明白にわかっている当り前のことがなかなかできない動物であるから、お説教も必要だと思うのである。

6. ノートについて

授業で使用する筆記用具はほとんど学校から支給される。これが教師の仕事を増やす原因にもなっているが、私が煩わしいと感じるのはノートの交換である。生徒はノートが終ると新しいノートを与えられる。大体、毎時間3人から6人の生徒がノートの交換を必要とする。そのため各教室に行く時、新しいノートを5、6冊携えていく。授業の前後であれば、まだままだが、授業の途中でノートが終ってしまって、私が説明しているのにもかかわらず教壇にやってくる。特に数学はノートを多く使用するので、その回数も多くなり煩雑極まりない。

まず、その使い終わったノートにざっと目を通す。そして、そのノートの一隅を切る(古いノートを再度提出して新しいノートを得ることを防止するためである)。ノートの表紙にサインをして、新しいノートにその日の日付を記入して渡すのである。なぜそんなに厳しくするかというと、生徒はノートが欲しくて、度々、教師を騙すからである。厳重に監督していても時々 misuse されたノートが見つかり、校長の逆鱗に触れることになる。生徒も頭が良くて、あの手、この手を使ってごまかそうとする。こんなところに使う能力を少しでも数学の方に注いで欲しいと思ってみたりする。

しかし無理もない。考えてみれば、自分でノートを買うお金がないのだから、生徒たちのノートを欲しがるともわからなくはない。勉強にはもちろんのこと、勉強以外のこと、例えば、写真を貼ったり、新聞のスクラップなどに使用したいだろう。日本では学用品は親が子供に買い与えるしノートは無駄に使われているといっても過言ではないだろう。余白がたく

さん残っているにもかかわらず、新しいノートを使い始めたりする。しかし、この国は、物が少なく金も少ない。時々騙されてあげようかとも思うが、心を鬼にして取り締る。

ごまかしを発見した時、「あなたは嘘をついてるんじゃないの、ノートをあげられませんか」と、何となく気まずい思いをしようと、悪びれた様子もなく、生徒は退散する。ダメでもともと、と思っているのだろうか。また紛失や盗難を理由にしてくる生徒もいるが、そういう場合、亦災のこともあるが、嘘が多いので自分で買わなければならないことになっている。ノートに関する話題をあげてみよう。

ある日、ノートを5冊持って教室に行き、板書をした後、机の上を見ると、ノートが1冊なくなっていることに気がついた。早速、聞いてみると異口同音に「知らない」と言う。級長の提案で各々の机を調べると、マハラというchildishな生徒の机から発見された。私が「マハラ！」とにらみつけると、教室中、ドッと笑いの渦になり、「マハラ too bad」の唱和が起った。マハラは「先生、決して今後、このようなことをしませんから許して下さい」と頭をかいているので、私も苦笑してしまった。

次の例は私が一人一人のノートを見るために教室内を回って採点している時に起った。スタッフルームに戻ってからノートが1冊足りないことに気がつき、しまったと思った。そのクラスは、私の担任のクラスでもあったので、ウヤムヤにすべきでないと思い、生徒の良心に訴えてみることにした。次の日、「昨日ノートを5冊持ってきて2冊与えたから3冊残っているはずなのに、2冊しかなかった。ノートに足がはえて逃げていくわけではない。返してくれるのを私はいつまでも待ってますよ。私は皆を信じていますからね」と言って授業を始めた。午前中は誰も返しにこなかった。やはりダメだろうかと思っていると、午後、一人の生徒が「先生、私が持っていきました。すみません」と言って、すでに自分の名前を書いてしまっていたのだろう、それを削り消した跡のあるノートをさし出した。半ば諦めていた私にとって感激の瞬間、「ああ、やはり信じられたのだ」と嬉しかった。さり気無く「Thank you, I'm happy」と一言いって、ノートを受け取ったのである。

忘れ得ぬマラウイの人びと

高橋 美智子

今日も帰宅すると、私の机の上には2通のエアメールが置かれている。マラウイの生徒や友人からのものだ。コーヒーブレイクのくつろぎのひと時、彼らからの手紙を読むのが私の楽しみの一つになっている。内容は様々である。学校生活の報告、ボーイフレンドのこと、新しく買ったステレオのこと、カメラを送って欲しいという依頼etc.、手紙を読むのは楽しいのだが、それぞれに返事を出すのはなかなか大変な仕事である。遅れると書く機会を失うので、なるべくまめにペンをとるようにしているが、時には返事を出す間もなく、次の手紙が来たりする。

生徒にとって切手代15タンバラはオレンジを20個も買える金額であり、決して安くはない。遠い日本からの手紙を待っている人々を想うと筆不精になっては申し訳ない。このように手紙を通じて私の心は依然としてマラウイに住んでいるのであり、マラウイに魅せられてしまっている私のアフリカ熱は冷めることを知らない。

帰国を前にしたフェアウェルパーティでの校長の言葉を、今でもはっきり思い出すことができる。

「高橋先生は日本人としてではなく、白い肌のマラウイ人の先生として教鞭をとったのだ。彼女はシマ（マラウイの主食）を食べ、マラウイの習慣に溶け込み、私たちと苦楽を共にしてきた。…略」私はこれを聞いた時、名状し難い感動を覚えた。というのも、私はマラウイで、どの程度ムズング（外人）ではなく、マラウイ人としての生活ができるかという課題を課していたからである。これは何もマラウイ人になりきるということの意味しない。つまり日本人とかマラウイ人という国籍の殻を脱ぎすてた、ハート・ツー・ハート・コンタクトで生きたいということだった。私は積極的に土地の人々と交際した。まず、お互い人間同士興味をもつ。しかし、最初にこちらの心を開かなければ彼らも心を開かない。私はまず同僚の先生の家族と接し、その交際の輪を店で働く人々、病院で働く人々へと広げていった。生活のテンポがゆっくりしていて、皆、お

しゃべり好きなので、知らない人々ともすぐ仲良しになった。しかし長くつき合っていくうちに利害得失、感情問題が表面に出てくるようになる。そこまでいくと同じ人間としてのつき合いができるようになる。このような人々とは遠く離れてからでも音信を交わすことができるものである。

休日には、寄宿舎に入らず、通学している生徒の家に、家庭訪問と称して3マイル以上の道のりも気にせず、よく遊びにいった。どの家庭でも必ず、最高の御馳走である鶏のシチューとシマを出してくれた。手料理に舌鼓を打った後、畑を見たり、おみやげに果物や野菜をもらったりして、楽しい1日を過ごしたものだ。

さて教師としての断面から見ると、2年半を大きく二つに分けることができる。結果的に前半は、数学教育を重点に置いたことになった。レポート(第2号)に明らかなように、遅れている数学教育の原因を考え、いかにしてレベルアップするか日夜頭を悩ませた。

後半は、教育の重要性を生徒達と考えることに専念した。高収入を得るためにより職業に就く。そのために国家試験に優秀な成績でパスする。ゆえに一生懸命に勉強しなければならぬ。それはそれで結構、でも、それだけと割りきるのではあまりにも寂しい。学校生活から得られるものは、知的、道徳的、人格形成等計り知れないものがあるであろう。人格、識見など人間形成の道場である学校の教師の絶対数があまりにも少ない。ゆえに教師の負担が大きくなる。そこで教師という職業が敬遠される。これでは全くの悪循環である。教員数の不足を他国のボランティアで穴埋めするという現状は打開しなければならない。明日を担う人間を育成するための教育、その教育に携わる者を養成していかなければ、物質的、精神的調和のとれた発展は困難ではなかるうか。日本の明治維新後、また戦後における急速な発展の一因は教育の改革と推進にあったという話も機会ある度に述べた。私の考えが多少なりとも理解され「先生、私も教師になります」という声が耳に入ってきた時は非常に嬉しかった。

2年半全体を通じて、生徒との心の触れ合いを求めた。教師は威厳を保つべきであり、生徒とあまり親しくはならないという風潮が強い。しかし、生徒の心を把握し、常に理解しようとする前向きな姿勢がなければ、生徒はついてこない。肝心なのは“和して同ぜず”の心構えであろう。私はスポーツ、ダンスパーティ、日常生活を通して生徒の心の中に入れていけたと思う。特に女子寮の寮母に当たる仕事をしたのがきっかけとなり、表面的には明るい彼女たちが、さまざまな悩みをもっていることを知った。学校に来ている間は親兄弟と

離れた生活で、相談相手は友達だけである。そんな時、先生には何でも相談できるという信頼をもたれていることが不可欠であると思う。

「先生、スーツケースの中に入れて日本に連れて行って」と泣いた女生徒、「日本のガールフレンドが欲しいな」と言っていた男生徒達。いろいろな顔が脳裏を横切っていく。皆よい生徒だった。あの子達が立派な社会人として逞しく生きている姿を、私は必ず、この目で確かめに行きたいと考えている。

高橋隊員の報告書を読んで

沢田和佐

アフリカ、マラウイの Balaka Sec. School における一人の数学教師として1年間、生徒と文字通り寝食を共にした日本人女性高橋美智子さんは、この報告書で、飾ることなく、ありのままを生々とした筆で記している。

まさに教育の原点がここにあるとの感想をもたされる。

生徒数 270名で、教師が6名、Form I から Form N まで6クラスもあり、高橋さんは一人で全生徒の数学を担当し、自習時間が多く、いわゆる免許外教師である歴史の教師がそれまで教えていたためか、生徒の数学の学力が極めて低いという最悪の状態から出発した。

ある意味では、この事は極めて幸せであったと言えよう。-3と-5の大小を問うと、自信をもって-5と答える子に、どう説明し、理解させ、納得させるかと考えるところから数学の指導法が始まる。

最初が3学期であったので、復習を主として、個人別指導が行われた中で、最初がキョトンとして狐につままれたような顔をしていた子がわかった時の目の輝きに喜びの瞬間を感じられた経験こそが、教師たる生甲斐なのである。

授業方法は典型的なもので、これはこれで結構であるが、授業中に全員に理解させるという方針はいささかきつい気がする。

いくら集中して授業を受けても、基礎のできていない子には理解することが困難である上に、どこが理解できないのかさえわからない子が日本の高校生でもいるのだから、余り理解させるのに急いではならない。教育は忍耐と愛情の仕事である。pre test と post test を毎時間行って、理解度を確かめながら進むようにしたい。しかし、Sec.に入れた子は皆 intelligent だから理解できないはずはないと advice することにしてるのは、極めて大切な良いことである。まず貢することが努力の道を開く。

数学における問題点として、数学に対する偏見、教材の不足、数学の有用性に対する認識の不足、の三つに分け、マラウイの現況を述べておられるが、いずれも、今後日本でも参考になる貴重な資料である。

特に & 4.(3) 制のイギリス式教育制度の中で、Primary School の 8 年間で、. Arithmetic のみであるといった事実は、日本の算数、数学教育がいかに進んでいるかを再認識させる。日本では小学校高学年で、数字以外の文字記号が指導され、図形についても、厳密な証明は別としても、直観的、操作的な扱いは低学年からなされている。

しかし、日本でも本格的に文字が登場し、幾何としての証明が始まるのは中学（それでも彼らの 7, 8 年に相当し、早い）からで、この時の指導の巧拙が、数学嫌いを作るか、数学に対する興味を持続させるかの分岐点になっていることは同様である。

教科書の不足についてはいささか驚かされた。適当なテキストを用意する必要がある。数学教師の派遣と同時に教材の有無を確かめて一緒に送ることも考えねばなるまい。

数学の有用性に対する認識の不足は日本でも同様である。1978 年、日本数学教育学会の宮崎大会のシンポジウムで「なぜ数学を教えるか — 数学と社会 —」がテーマ（筆者もそのメンバー）として取り上げられたのも、そのことを考えるためであった。その詳細については数学教育学会誌を参照されたいので、ここでは省略するが、一言だけ、私見を述べておく。

① 数学教育は生徒の人間形成の一翼を担うものである。……一人一人の生徒に自ら考える力を養い、創造的な知性と技能を育て、いわゆる数学的な見方、考え方を伸ばすことに、その価値がある。

② 数学の学習における知的活動の面白さや喜び、考えることの楽しさを体験させ、数学における創造（例えば公式などが、どんな必要性から、またどんなアイデアから考え出されたかに目をつけさせる）を楽しませることが大切。

①、②をまとめると、「数学教育にロマンを求め、ロマンを数学教育に生かす」ことであろう。その意味では、数学クラブは大切である。数学を固いものと考えず、大いに数学クイズ等で生徒と共に楽しんでほしい。

パニッシュメント、ノートの話は、国情の違いがよく描かれていて、筆者にも大いに参考になった。1 女教師が幾多の経験、それも日本国内では 2 度と得られないであろう体験の積み重ねの中で成長していく姿が感じられて、すばらしい結びになっている。

2 年間、本当に御苦労様でした。（青年海外協力隊技術専門委員＝理科教師）

5歳以下児の予防接種キャンペーン

第3号報告書

53年4月2日記

派遣国 マラウイ 51年2次後期組
職 種 看護婦
氏 名 齊藤 昌子
配属先 St. Martin's Hospital,
Malindi, Magochi

齊藤隊員の略歴

氏 名 齊藤 昌子
生年月日 昭和28年2月9日
出身 県 宮崎県
職 種 看護婦
派遣期間 52年4月～54年7月

I はじめに

今回は、現在、当病院で最も重点を置き、推進しようとしている5歳以下の子供達の予防接種、ならびに母親への健康教育等について、その歩みと現在の状況及び今後の展望について報告する。私達はこれを「Under Fives Clinic Campaign」と称している。

1. 多い栄養失調児

M. C. H. (Maternal and Child Health Services) の毎年の報告によると、Southern Region (マラウイの) において、ここMangochi地区は特に栄養失調児の割合が高く、そして、それに反比例して予防接種率が低いとされている。

実際、当St. Martin's Hospitalにおいて5歳以下の子供達の入院数比率は、全体の入院者数のうち40%以上を毎年占めている。さらに死亡率も約8%である。その疾患の多くは予防できうる疾患であり、また多くの子供達は来院の動機となった疾患だけではなく、その誘因として栄養失調、貧血の状態におかれている。このような子供達は重症から死に至りやすいし、幸いに疾患そのものから回復できても、5~10日の入院では栄養状態の改善まではとても望めない。またえてして、そういう子供達の多くは、国で奨励している予防接種も受けていないばかりか、村で生まれた場合には、誕生日すら定かでない場合が少なくない。

私達の一回目の村巡りの結果からは、実に3人に一人の子供はMarasmus,あるいはKwashiorkorと呼ばれる栄養失調の状態にある。また予防接種を完全に受けているのは1歳以下で7%、1歳以上でさえ、ほんの10%である。野放しにされているというより、親の無知、そして貧困という根深い問題がある。

2. Under 5s Clinic

M. C. H. では、現在、子供達の健康増進を図ってUnder Fives Clinicと称する、5歳以下の子供達の為の特別なClinicを各Hospital, Health Centerに設置させ、月毎に、何人の子供が、どのような予防接種を受けたか、また栄養失調児の割合などについて報告することを私達に義務づけている。それらのClinicでは、親への健康に関する知識の普及、子供の体重測定、子供一人一人につきカードを作製し、それに評価、抗マラリヤ剤の投与、予防接種(Small pox, B. C. G., D. P

T., Polio の4種類、Measles (麻疹)については経費が高い事、薬品の保存が難しいことから、対象からはずされている)等を記録し、必要に応じ、治療を施している。費用は最初に50 tambala (150円)でカードを作製し、他の疾患などで治療を受けたりしない限り、5年間有効で、その他一切の費用を必要としない。

ところで、このUnder 5s Clinicは、すでに20年来の試みであるが、果たして、効果があがっているのだろうか。手元に現在までの状況を示したもの(M.C.H.への報告等)がないので、統計的に言う事は出来ないが、前述したような現状から見て、甚だ疑問である。

また当病院の附属施設としてNutrition Rehabilitation Unitが2年前から開設され、病院を退院後、続けて栄養面での指導が受けられ、また、そこでは独自のクリニックをもっていて、栄養失調児を対象に食料の供給、母親への啓蒙を行なっているが、2年間で完全に回復しえたcaseは73例のみで、ほとんどは、途中で、治療をやめてしまっている。

そこで、私達は、このUnder 5s Clinicの低迷と、せつかくある設備をもっと有効に活用する為に、何らかの工夫はできないかと考え、まずその低迷の原因を探る為にmeetingをもった。それはMedical Staff, Home craft Worker (生活改良普及員のような職種)、そして各村を統率するMalawi Congress PartyのLocal leader (実際、この彼らを抜きにしては、一切、何も出来ないというのが現実で、病院からの連絡や、新しい企画も彼らを通して村人達に伝えられる)とでもたれ、そこで次のような事が指摘された。

無知であるということ、あるいは、いくらか認識していたとしても、歩くという事と、自転車だけが、彼らの交通手段であるから、遠いところに住む人達は、よほどでない限り、病院にこようしない。African Medicineも、病院の治療も、彼らにとっては同一選択肢としてならんでいるから、身近なAfrican Medicineに頼る事になる。まして、病気になるようにと、予防するという事にどれだけの関心があるかは、推して知るべし、というところである。

貧困、この地区には特別な産業もなく、ほとんどが例外なく貧しい限りの生活をしている。現金収入の道をもっている人はほんとにわずかで、1ヵ月10 kwacha (約3000円)のサラリーでもあれば、この辺ではい

い生活をしている部類に入る。そんなところだ。従って、平均70 tambala (100 tambala = 1 kwacha) の入院費用も、そう簡単に彼らの手を離れないという事になる。

長期の入院(例えば1週間以上)は食料の問題(病院給食がないので彼らは自分でもってきて料理せねばならない)、村に残した他の子供達や家族の世話、耕作の事情などによって、きわめて容易に妨げられる。

そして、もう一つ、指摘されたのは、むしろ母親よりも父親の関心の低さに問題があるという事だ。入院加療中の子供を父親が経済的理由、家族の世話、あるいは治療の早期効果が見られないからと、強引に連れ去るという事は、実際に私達がよく遭遇する場面である。「Women are always under men」と現地の人が言うように、母親は必要性よりも先に自分の夫に従わねばならない。例えば病院にくることさえ夫の許可がなければこられない、と彼らは言う。そしてさらに困った事には、一夫多妻のこのあたりでは(住民は、ヤオ族が多く、彼らの宗教はイスラム教である)一人の男性が、そういつも、全部の妻と子供達の面倒を公平にみていないから、困り果てた母親が子供をつれて病院にくると、あとで知った父親が迎えにくるという事になる。もっとも、こういう長い間に根づいた慣習に対しては、私達にはどうする事も出来ない。

II 村々を巡回してキャンペーン

さて 上記の結果より私達のとった方法は、病院でただ待っていても何ら改善の方法はない。自ら村々を巡って実態の把握につとめると共に、Under 5s Clinicを各村で開き、また村に潜在する栄養失調児の発見と母親への啓蒙、父親へのそれとを試してみる事になった。

そして、15の村を地理的条件から見て選び、各村より村のLeaderを一堂に集めて、私達の企画を説明し、賛同を得、私達が行く前日に病院より伝達を出すので、村の人達を実際に集めるのは、Leaderを通して行うという事を決めた。そうして始まったのが、Under 5s Clinic Campaignである。

チームの編成は	Doctor あるいは Medical Assistant	1名
	Nurse あるいは Midwife	1名
	Home Craft Worker	1名
	Ordarlies	1~2名

-
- 内容は ① Health Talking M. A. あるいは Home Craft Worker によってされる、抗マラリヤ剤の投与
- ② 体重測定と評価、及び個人個人へのアドバイス
- ③ 個人個人のカード作制
- ④ 上腕周囲の測定（1～4歳児を対象に、14cm以下はその度合によって栄養失調の目安とされる）
- ⑤ 予防接種

費用は、Polioを除き、他の薬品は free で手にはいる事から、一切無料という事になった。実際、10 tambalaでも徴収すれば誰もこないだろうと危惧された事も事実だが。

この計画に沿って、Malindi Hospitalから南北10 miles の範囲にある15の村を目指し、9月21日、Taliyaという村を皮切りに、私達の活動が開始された。この村巡りはこの私にとって、推進者の一人ということだけでなく、村に入って、いろいろなものを見たり聞いたりするだけでも、十分に心をわくわくさせるものがあった。面白い一言につきる。

1. 貴重な見聞

まず、最初のTaliyaの訪問といったら、それこそ誰もいなくて、一同ガックリ。チーフを呼びだして、午後もう一度くるからとハッパをかけて出なおしたり、そうかと思えばMakumbaという村では150人以上の子供達が迎えてくれて、まっ暗になっても自動車のヘッドライトのもとで注射をするというような恐ろしい事をやってみたり、それでもやり終えず、次回にまわすという事もあった。全く、“役損”というのか、注射をするのが私の役目の為、私の顔をみると子供がにげだす始末。何回かは、母親と一緒に子供をおいかけは泣かせてしまった。村によっては、というよりチーフの力によって、村人達の集まり方がちがうので、Taliyaのようにだめなチーフもいれば（最近のニュースでは、新しい人に変更したらしいが）、また、Chipelekaのように、チーフ自ら指揮して、体重測定や注射をする時に子供を抑える等多くの手伝いをしてくれるところもあった。

一段落して帰ろうかと思っている時に、のっそりやってきて、おしかりを受けるママ。どうしてもっと早くこないのか、とたずねれば、Under 5s Clinicでやってきているという本来の目的は全くそのかけらすら知らず、他のママ達から、Chizungu（白人）が来ているときいて、見に来たと

言う。もうおこる元気もなく、とにかく、よくやってきたと歓迎して、初めっからやり直さざるを得ない。ある時など、子供達が待っているにもかかわらず、やってきたのは子牛をつれた牛の一群だったりしたという事もあった。

しかし、一体、何人の子供を泣かせただろう？ほとんど全部の注射を私一人でやっていたのだから、私の顔が注射器みたいに思われて、きらわれてしまってもいたしかたない。まあ、これも皆子供達の為だ。本当に損なお役目だと自分でなぐさめたりもしてみる。

また注射をしていると、対象外の子供達がまわりをぐるっととりかこんで、どうした、こうした、と私がつたないヤオ語で母親と話していれば一つ一つまねしては、笑い転げるので、うるさいのと、じゃまなのとで頭にくることもしばしば。ヤオ語で追いはらっても、またそのまねをされるばかりで、全く効きめがない。でも、そんな時は患者が少なくなったのを機に、歌って、踊ってのショータイムに早変わり。実に皆、こういう事が私にもまして好きだから、一人でばかな事をしているという事にならなくて済むのは、すぐ悪乗りする私には、もっけの幸いだ。

しかし、これとて本来の目的から決して逸脱しているわけではない。何故ならば、この歌たるや、なんと、日本語に訳すれば「ホラ、住血吸虫がお腹のなかで血を吸ってるぞ」というような、げに恐ろしく、アカデミックな歌だったりするのだから。

2. Ministry of Healthの理解を得るのに苦労

さて、このように行く先々で、それぞれの効果をあげながら、ようやく軌道にのったころ、おもわぬ横槍がはいった。それは Ministry of Healthに属するM.C.H.のCoordinatorからであった。当然ながら、この企画を始めたことによって予防接種の数が飛躍的に増えた。それをM.C.H.では不審に思った、と単純に解釈すればそういう事になる。

2ヶ所の村(Taliya, Chinbende)についてはMobile Clinicとして、以前より決められているので問題はないが、他の村については、何故そういう事を始めたのか、どういう計画と見通しをもっているのか、その経済的基盤はどのように支えられているのか、などといった、決して反対しているのではないと言いながらも、あまり好意的とは受けとれない態度だったように思って、Doctorともども憤慨したのを覚えている。

もちろん、私達は前記の理由によりその必要性を認め、また実態を把握

する為に始めた事であるからあっさりやめるわけにはいかない。そして Doctor Manning の多大な努力と、それまでの4ヶ月間の私達が行なった成績と、資料によって、2月の1日、2日と Ministry of Health に出向いての討論の末、ようやく、私達の企画に理解を得ると共に、それまでの資料をもとに、私達の計画した今後の活動方針も支持された。その活動方針というのは以下の様である。

今後、Moto, Biti Kalanje, Chipeleka という三つの村において、毎月1回ずつ、Under 5s Clinic を現行の方法で続行する。この3村を選定した理由は、Moto, Chipeleka に関しては、他の Taliya, Chimbende へのちようど半分ぐらいの距離にあると共に、大きな村で、子供達の数も多いこと、Biti Kalanje に関しては、この村は以前、類患者が隔離されていたところなので、今だに偏見が強く、他の村との交流が少なく、従って病院との連絡もあまり良くないためである。

さらにもう一つのプランは、2, 3の村を選び、その中から2, 3名ずつの婦人を選出してもらい、Health Adviser として training をすることである。当院でトレーニングをしたあと、各村へもどって子供達の体重測定をやって、普段から健康に留意してもらおうと共に、母親への啓蒙につとめてもらう事になる。

このように方針がきまったところで、当面の問題はこの training の開始である。training にかかる費用は、すでに O. X. F. A. M. (イギリスの海外支援団体) から承認が得られ、District Commissioner によって、現在三つの村を選び、婦人達の選出をするよう働きかけがなされているところである。一つの村からは早々と名乗りをあげてくれたが、あとがいっこうに続かない。ちょうど、Doctor の交代時期で、新しい Doctor がいつくるか予定がたたず、それまでの間この企画における責任を私がつとめることになった。あせらずに、しかし着実に、是非ともこの企画を実現させたいと思う。

3. 深刻なスタッフ不足

一方では、病院自体の破滅的経済危機を背景にして、今はスタッフの不足が深刻な問題である。私が赴任したときには12人もいたオーダーが今は Driver を含めてわずか7人と、ギリギリまで減らされ、しかも、多くの人数で少しの仕事をする事に慣れきった彼らは、いっこうにその仕事のテンポが変わらない。night duty, off duty, 病欠を考慮にいれる

と、毎月きりきり舞いの状態で、私にいたっては、Female Ward, Isolation Ward, Theaterの責任とともに、さらに、このUnder 5s Clinicに関する一切のorganizingと頭の中は大混乱。他のスタッフはスタッフで「too much job」と、私に言わせれば、ちっとも何もしていないで好き勝手に文句ばかり言い、本当に忙しい時は、まるで、けんかばかりしているような気がする。このような状況の中で、この企画をすすめるのは、至難のわざのようだが、スタッフ間の協力と理解が得られることが第一である。Doctorがいるうちにmeetingを行ない、責任の所在を明確にすると共に、今後の方針を明らかにして、今のところ、なんとかすすめている状態である。

私が赴任したのが去年の5月。仕事を始めて、汚ない事、子供達があまりにひどい栄養状態におかれ、手遅れの為の死亡など、かわいそうな運命をたどる子が多い事にびっくりした。何とかならないのかと思っても、新参者がアフリカにきて、想像をはるかに越えた現実にどぎも抜かれていても、誰も一緒に驚いてくれる人はいなかった。そんなものだ。仕方がないよ、というのが皆の対処の仕方。そうやって悶々としているところにDoctor Manningが赴任され、自分と同じように驚きを示された時は、自分と同じ見方をする仲間ができた思いだった。そして実際、彼は原因を問い、対策を考え、現在の方針をうちたてた。私はただDoctorのもとで働いてきたにすぎないが、一番関心が高いのがこの私だったため、今はこうして、Doctorのあとをひきついでいる。

前述したところが、現在の状況と課題で、今後、どのように展開するかそれは次号の報告書で乞う御期待というところで、私自身にハッパをかけて、今回の報告書の終わりとする。

Ⅲ 資 料

- ① Under 5sの入院比率、死亡率。
(全体のもは第1回目の報告書にその数を書いた。)
- ② 疾患の種類(Under 5sにおける)
- ③ Malindi Lake Shore 地区の地図。
私達の行なったClinicを示すもの
- ④ 第一回目の村巡りにおける予防接種率
栄養失調児の割合等

⑤ Arm Circumferenceについて

⑥ 現在の予防接種の週間スケジュール

なお、④に関しては Doctor Manning によってまとめられた数値をグラフにしたものである

① Under 5s の入院数及び総入院患者数に対する割合。

項目	年次	1974 (8~12)	1975	1976	1977
1歳未満の入院者数(人)		185	327	320	213
1~5歳の "		320	379	409	285
総入院患者数		1,061	1,740	1,520	1,407
5才未満の占める割合		約48%	40	48	36

② Under 5sにおける疾患の種類、件数及び死亡者数。

(1977年1年間の統計から)

疾 患	件 数	死亡数
Measles (麻疹)	65	16 (肺炎)
Chest infection (胸部感染症)	113	8)
Malaria (マラリア)	348	4
Malnutrition (低栄養)	69	5
Anemia (貧血)	185	3
Meningitis (脳炎)	5	3
Introsusception (腸重積)	1	1
Bilharzia (ビルハルジア 住血吸虫症)	40	
Hook worm (鉤虫)	20	
Skin infection (皮膚感染症)	20	
Gastroenteritis (胃腸症)	18	
Whooping cough (百日咳)	10	
Heart failure (心疾患)	8	
Tuberculosis (結核)	7	
Poliomyelitis (灰白脊髄炎)	4	
Fracture (骨折)	4	
Osteomyelitis (骨髄炎)	2	

マラウイⅢ……5歳以下児の予防接種キャンペーン

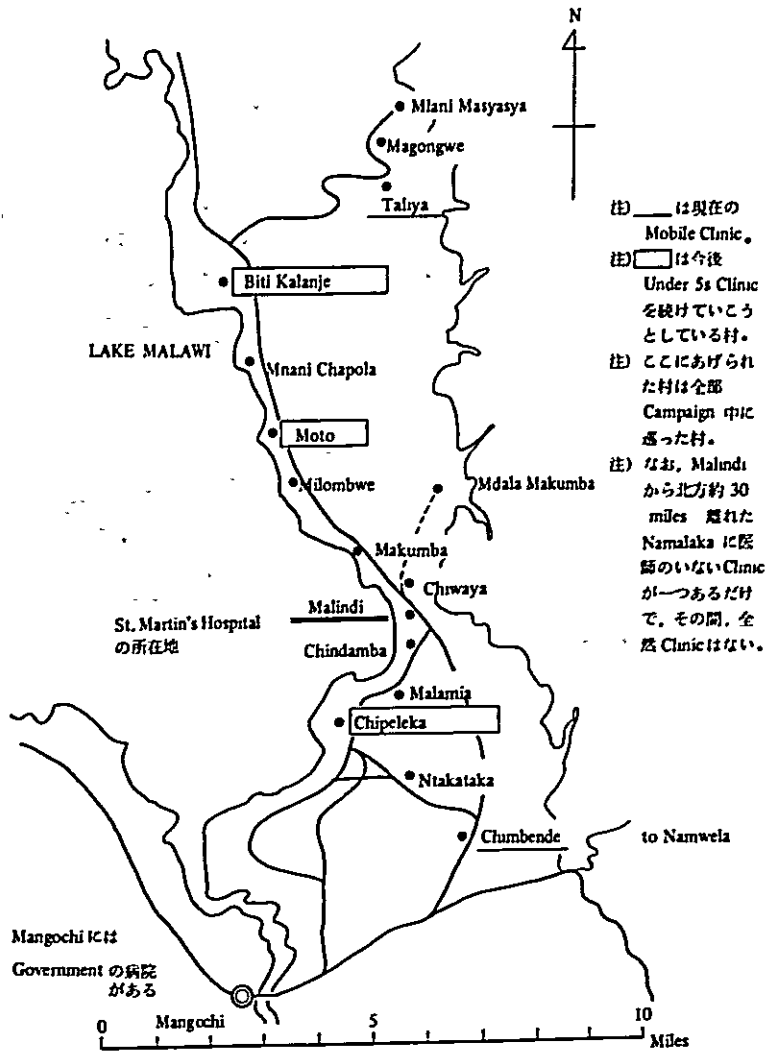
Allergy	(アレルギー)	2
Talipes	(彎曲足)	2
Hepatitis	(肝炎)	1
Conjunctivitis	(結膜炎)	1
Nephrotic syndrome	(ネフローゼ)	1
Rectal prolapse	(直腸脱)	1

(注) 全体の死亡数は1年間40件、約8%である。麻疹のほとんどは肺炎を合併して死亡している。低栄養児はこの数の上では全体に占める割合は低い、これは、標準体重の80%に満たないものをさす。標準体重以下を全部さすとすると、その割合はもっと高いはずである。

貧血も、Hb値を7.0 gm %以下としての数である。

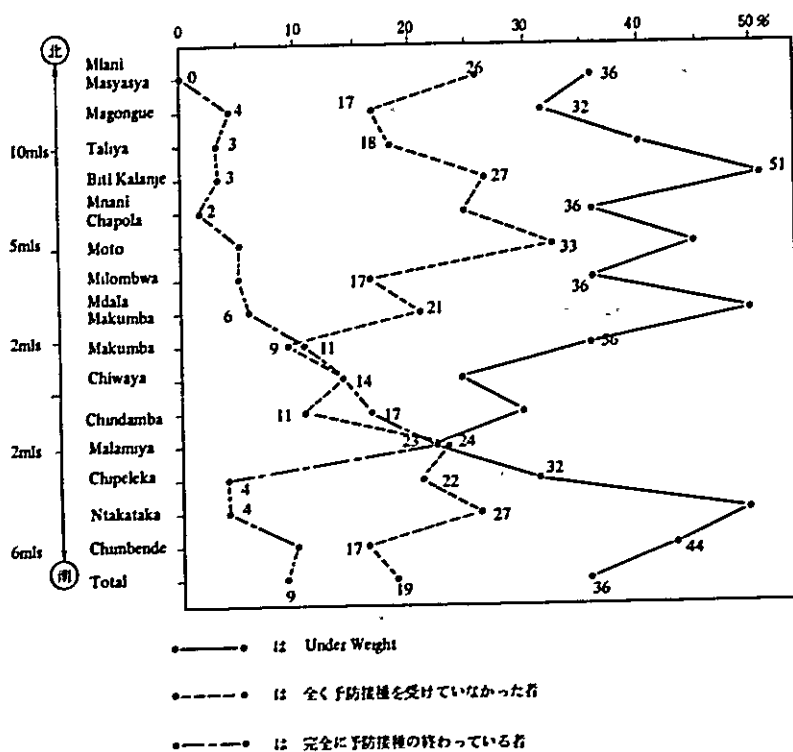
BilharziaやHook wormは検査が全部の件について行き届いていないので、このように少ないが、もし、全件に対して検査をすれば、この数と貧血者の数はともに増え、また、その数は低栄養児の数とも似たものが得られるのではないだろうか。Malariaは入院患者数の約3分の2が患っている。子供の熱、下痢をみたらMalariaと思え、といわれるゆえんである。

③ Malindi Lake Shore 地区地図



④ 第一回目の村巡りにおけるその時点での予防接種率及び栄養失調児の割合 (その時の attendance に対する割合)

[表 I]



マラウイⅢ……5歳以下児の予防接種キャンペーン

Attendanceの数 ()内は一歳未満	
Mlani Masyasya	25 (10) (Mlani Masyasya + Kwilasya)
Magongwe	23 (6)
Taliya	60 (23)
Biti Kalanje	33 (10)
Mnani Chapola	51 (15)
Moto	98 (29)
Milombwa	76 (15) (Milombwaを中心に4つ の村で)
Mdala Makumba	47 (6)
Makumba	139 (33)
Chiwaya	145 (40) (Chiwayaを中心に3つの 村を含む)
Chindamba	75 (24)
Malamia	51 (15)
Chipeleka	111 (25)
Ntakataka	22 (4)
Chimbende	89 (35)
1055 (300)	

表I, IIにおける%は、上記の数より割り出したものなので、一つ一つの村を要すというのは無理かもしれないが、ある程度の事はわかるのではないだろうか。村ごとの参加者の数の開きが、そのまま、表I, IIに表われており、病院から遠くなればなるほど、病院でおこなっている Under 5s ClinicやNutrition Rehabilitation Unitの利用が少ない事がわかる。

なお、このあたりでは、全体の人口が不明、出生年月日が不明という点から統計をとるのは非常に難しい。子供が生まれたとき村でどのようなことが起こったか(例えば祭り、国の祭日等)をたずねて、年令を推定した。

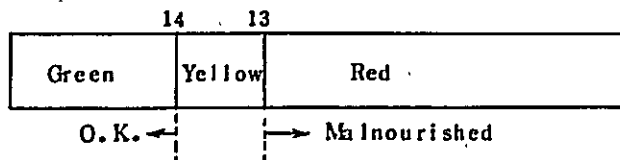
表I, IIは、5歳未満全体の統計だが、さらに1歳未満と1~4歳とに区別すると、次のようになる。

	1歳未満	1~4歳
全く予防接種を受けていない者	28%	15%
完全に * 受けている者	7	10
Small poxを受けている者	33	71

B. C. G. を受けている者	56%	66%
1回以上のD. P. T. を受けている者	53	66
3回ともD. P. T. を終わった者	15	25
1回以上のPolioを受けている者	54	57
3回ともPolioを受けていた者	11	20

⑤ Arm Circumference

不要になったレントゲンを利用して、メジャーをつくる。



対象は1~4歳児で、上腕にて測定する。

13~14cmはボーダーライン、13cm以下は栄養失調の目安とされている。

⑥ 現在のUnder 5s Clinicのスケジュール

月	N. R. U. (月・金は当病院でClinicが開かれる日で多くの 子供達がここに集まる)
火	Chimbendeの一つの村へ行く
水	Taliya Clinic
木	当院におけるUnder 5s Clinic
金	N. R. U.

日本に帰って考えること

斎藤昌子

「住めば都」とは、よく言ったものだ。初めて、任地を目にした時の「貧乏くじをひかされた」という印象は、今もって、よく覚えている。仕事を始めたら始めたで、想像を超えた現実には度肝を抜かれて、とにかく、他人の所は、よく見えた。交通の不便な事、風呂のないこと etc.。しかし、美しい湖と、楽しい人々、時には、病院の裏山に登ってはるかに広がる湖と平原に、自分のくよくよしている事等とるに足らぬ小さな事だと気持ちを洗われて、やっぱり来て良かったと思った事も度々。

「シスター」と呼ばれる事から始まって、何しろ一つ一つが、それまでの経験にない事。自分が「異質」な者だという認識から、積極的に、彼等の言葉を学び、「理解」とは一体何ぞと、異なった価値観の中で暗中摸索しながら、3ヶ月、6ヶ月と過ぎ、ようやく私が住む所、Malindi が「都」になった。

環境に慣れると余裕をもって、自分がその一端を担っている医療の状況を見る事ができる様になった。そうすると、私達が日頃相手にする病気は、その地域の人々の生活背景と深い関連があり、そしてそれ故に、その改善によっては、多くのものが予防できるものだと、改めて気付いた。事実、マラリア、寄生虫、結核と、どれをとっても病院で一時的に治療しても、村に帰れば元の木阿彌。入院患者の40%は5才以下の乳幼児で、多くの子供が、入院の対象となった疾患の他に、栄養失調、貧血の状態にあって、えてしてそういう子供達は、国の奨励している予防接種すら満足に受けていない。ただ親が「水を飲ませる事」を恐れたばかりに失われていく幼い命、手術が必要だと説得の未、親族会議の代表が、患者を引きとりに来たりする。宗教や価値観の違う世界だから、そういうものだろうと考えて通りすぎられるものだろうか？ よそ者の私に、問題が強烈に写っても、そこに住む人々には当然の事、仕方のない事なのだろうか？

私の疑問は、同様の意見を持ち、又、途上国経験のあるドクター・メニングの着任によって現実的解決の方向をさぐり、充実したものへと展開する事になった。「何か出来るはずだし、しなくてはならない」というのが一致した意見。

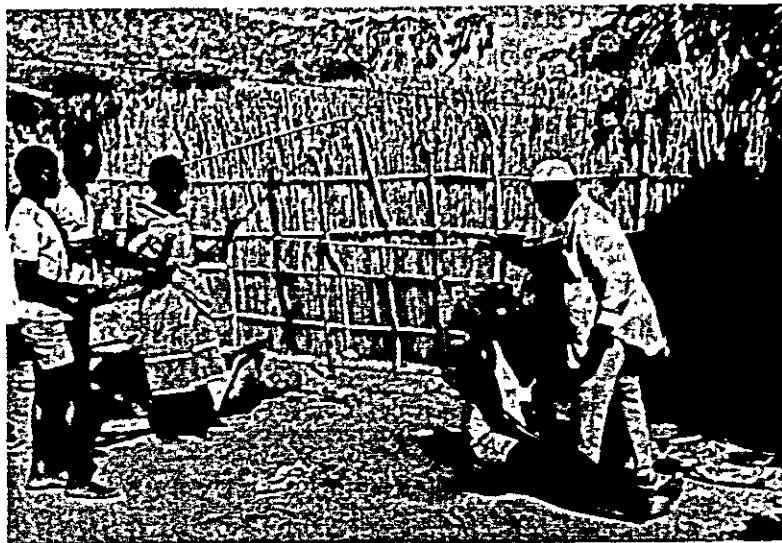
現地人スタッフの協力を得て、私達のとった方法は、まず、問題を明らかにする事、その為に、各村の代表者達との話し合いを開き、一方で、データをとる為に（主に栄養失調児の割合と予防接種の普及率）アンダー・ファイブ・ビレッジ・サーベイを行なった。話し合いからは、遠くの病院よりも、身近な民間療法（アフリカン・メディスンと呼ばれる薬を主に用いる）に頼るという事、予防注射や妊婦検診の意義を知らなかった事、現金収入のない人にとって、入院費は高い事、子供が入院し母親をその付き添いにとられると、残された家族の世話をする者、あるいは耕作をする者がいないと困るので、容易に入院が妨げられる事、一夫多妻のこの地域では、父権が一方向的に強く、女性は従わざるを得ない為、父親の理解と協力が必要な事など多数の要素が指摘された。

そして、サーベイの結果は、病院からの距離が遠くなる程、病院の行なう医療サービスを受ける恩恵は少なく、栄養失調児の割合は増加し、予防接種の普及率は低くなるという事ははっきりと示していた。住宅事情をとりあげても、トイレのない家、湖又は川の水を直接飲水用としている家、牛、山羊と一緒に居住する等、衛生上の問題が多い。

これらの問題を解決する一つの方法として現行の、モービル・クリニック—体重測定、予防注射、健康教育を目的として、病院以外で行なう乳幼児検診—をもっと多くの場所で頻繁に行なう事も考えられる。しかし、それには村まで出かけるスタッフや運営費の問題等限界がある。その上、いくら病院から出向いた所で、村の人達が、その意図する所を理解し、健康教育を実とする為には、人々が、健康というものを主体的に考えてこそ効果のあがるものだ。私達は、そこで、村から信望厚い婦人達を選んで、病院で、基礎的な衛生知識や、生活上の工夫を教える事を提案した。子供の養育、栄養、予防注射の意義等含めてコースは約一週間。この婦人達を、ビレッジヘルス・アドバイザーと呼び、彼女らが、その村々で、リーダーとなって、他の村人に対する指導を行ない、病院と連携して働き、村人自らが、健康の担い手となる事を目指すものだ。既に地域のリーダー、厚生省との交渉を重ね、実践の段階にはいり、一年以上を経過した。一進一退しながらも続行されている。地道ではあっても、村の人達自身に、そういう事を考える機会が与えられた。

地域の医療を考えた場合、教育、産業の開発を抜きにして考える事は出来ない。又、それ故に、最も望ましい方法を考えるのは、その地域に住む彼等自身であるべきだ。そこに一時期だけ関わる私達は、ボランティアだからと、全く、自他覚的に「よそ者」で過ごす事も出来る。しかし、「よそ者」だからこそ、

問題を客観的にみつめる事もでき、それを、そこの人々と一緒に考えていく事ができるのも、私達のいい所なのではないか。



民間療法……ウィフチ・ドクターの治療風景

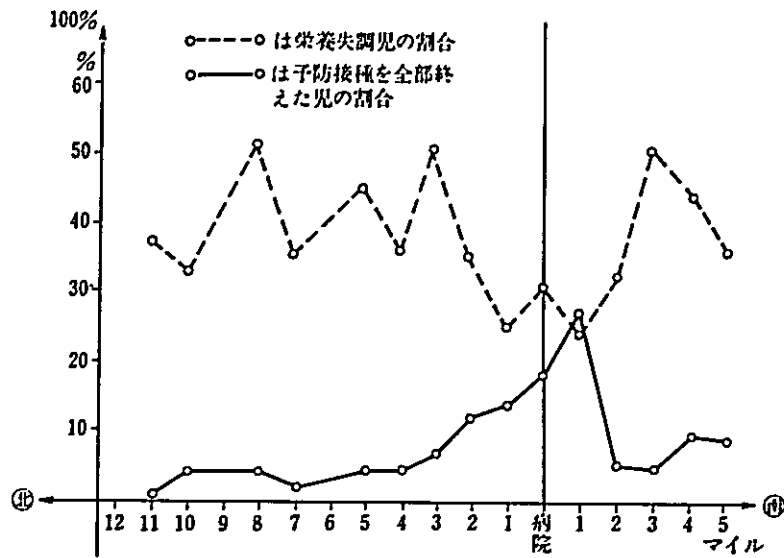


栄養失調児を、健康児と比較してみせる
病院のスタッフ



病院には、給食設備はない。空地を利用して、
食事の準備をする

〔表〕ピレッジ・サーベイの結果の一部



齋藤隊員の報告書を読んで

森 まさ子

報告書が Under Fives Clinic Campaign に関するものであり、その歩みと現在の状況および今後の計画に至る内容を含むものである。全体を通して客観的に、明解な記述であり、可能な限りに於て状況分析を加え、必要に応じて資料も添付し、要約された解説を交じえるなど、業務報告として、非常によく整理されている。また現地の文化や経済の実状を考慮しつつ可能な限りに於て健康問題改善の視点に立った実態把握に始まり、企画、推進、運営のための努力と熱意が感じられる。尚臨機応変の行動力にはさすがさが残る。

隊員の所属病院 St. Martin's Hospital における全体の入院患者数から子供達（5才未満）の入院比率の高さを指摘しその多くが感染症によるものであり、予防が可能であること、誘因となる栄養失調、貧血が、病状回復を困難にしている事の気づきから、マラウイにおけるMangochi地区の栄養失調児の比率が高いこと、予防接種率の低さとその原因にふれている。このようにして20年来行われて来た Under Fives Clinic の低迷の原因を探るためのmeetingをもったことも、その構成員も適当と思える。

原因を分析し、対応策として実地に趣き実態の把握と Under Fives Clinic を兼ね栄養失調児の発見と母親への啓蒙を試みる着想も素晴らしい。ここで15の村を地理的条件から見て選び、とあるが、子供達のための特別なClinicを各病院とHealth CenterでおこなうことになっているのはM・C・H (Maternal and Child Health Services) に報告するという事でその分担地区が決まっていなくてであろうか、疑問である。病院が巡回するClinicは、既にMobile Clinicをおこなっている、2つの村 (Taliya と Chimbende) が決められていたのではないかと思う。拡大した範囲に及ぶ計画であれば、事前にMinistry of Healthの了解を得ておく必要があったのではないだろうか、病院の機能とHealth Centerの機能の特色を生かしつつ提携する事も考えられる方法である。

各村のリーダーを一堂に集めて、企画を説明し協力態勢を得た点も現地に密着した方法で今後の推進にも効果的であり、チームの編成や内容に於ても適確である。(M.C.H.の協力が得られた場合は、両者でチームを編成するか、内容を打合せて方法を統一し、交替で当る等…検討できよう)

実状調査のために、15の村にわたる巡回は、病院の日常業務を進めつゝ尚人員も極度に節減の折、大変な努力と献身的努力で実行された10マイルの活動の重みを感じられる。これだけの企画から実施に至るまでの過程に於て、検討に検討を重ね、現状分析だけでも容易ではない筈、院内担当者との話し合い、役割分担以前の人選など、継続性も考慮された大事業の推進力は何であろうか。子供達の健康増進に夢を託して止まないボランティアの精神でなくて何であろう。

その結果飛躍的に増えた予防接種の効果が疾病の子防となって効果を発揮し、人々の認識となるまでには、まだ時間と啓蒙と継承が必要な事は申すまでもなく、これからが本番である。栄養改善のためのNutrition Rehabilitation Unitも2年前から病院の附属施設として開設され、退院後、引き続き栄養指導が行われたり、食料の供給、母親への啓蒙を試みているが、栄養失調の完全回復例が少く、途中で治療をやめていく実状も、もう少し突込んで知りたい処である。問題が発見できるのではないか。現地の人々の食生活や農作物の実態を知り、嗜好も考慮しつつ改善できる方法を現地の人々と共に考えてみるための試みと同時に、衛生環境を改善するための指導も行われると推察する。

今後の計画として、3つの村を選んだ動機も目的に叶っていて適切であろう。選ばれなかった村のクリニクは、Health Center によって引き継がれるのであろうか。

Health Adviserのtraining計画、については、着目と、方針に於て期待できるものである。2～3の村の婦人達を選出して貰うこと、病院で教育した事を村へ帰って実践することは生活に密着する方法で行われれば、関心と呼び、村の人々への啓蒙から、子供の健康に発展できる手がかりとなればよい。どの母親でも、子供のためによい体験であれば積極的に実行するものであるから…。文盲の人々に伝えるためには、わかり易い方法で、視覚や体験を取り入れるのが最善であろう。

この報告書の中で斎藤隊員が、Clinic の暇を見て子供達と共に歌や踊りで住血吸虫のことを扱った…と書いているが、子供向けの衛生指導などこの様な方法で、巧まず演じられるのは天性その道の達人と見るべきか。(青年海外協力隊技術専門委員=看護婦)

中堅土木技術者の育成を願いつつ

第3号報告書(53年5月~53年8月)
53年11月13日記
派遣国 マラウイ 52年1次前期組
職 種 土木設計
氏 名 後藤 和正
配属先 Design Department,
Lilongwe

後藤隊員の略歴

氏 名 後藤 和正
生年月日 昭和26年4月24日
出身 県 千葉県
職 種 土木設計
派遣期間 52年8月~54年8月

1977年8月にマラウイに派遣され、翌9月から工業補給省設計局に勤務。約1年間の協力活動を通して体験し、自ら感じた事を今までの反省材料とすると共に、残された任期への参考資料となるように、以下に報告する次第である。ただし、現在、当設計局には5名の隊員がおり、種々の詳細についての考え方、感じ方には差異があることを考慮して頂きたい。

前レポートで再三に亘り指摘したり、重複すると思われる箇所についても、問題提起が明確になるように再度付け加えた。

I 現 状

〈根強い白人支配〉

設計局設計部門においては管理職である英国人が主軸になり、スタッフの管理から、道路、橋梁、構造設計の全域に至るまで、絶対的な指揮権を保持している。それとともに英国人のもつ一種独特の閉鎖的雰囲気から、一部のマラウイ人スタッフからは「彼らは今だに植民地時代の気分が抜けていない」と陰口をたたかれたりするほどである。

ちなみに、全ての白人は管理者としての階級である Supergrade (S9 ~ S5 程度) を有している。昔年海外協力隊員は、そのすぐ下の P.O. (Professional Officer) であり、この階級を所持しているマラウイ人は、目下、設計部門においては見当たらない。

〈マラウイ人技術者〉

Secondary school 卒業程度のマラウイ人の大方は、トレーサーとして我々の描いた図面のインキングに従事している。5, 6年程度トレーサーとしての経験を積んでいるが、彼ら自身は Technical Officer (T.O.) の職名を有しているので、トレーサーは T.O. の仕事の一部と認識して、ただ名ばかりのトレーサーで終わらずに、将来は、実際に局内で行なわれている各種設計の一端を担いたいというのが、彼らの希望である。

Polytechnic school (工芸学校) 卒業程度のマラウイ人は初め訓練生の身分で、P.O. 以上の仕事を手伝いながら、自ら設計要領を取得してゆく。現在ただ一人 Senior Technical Officer (S.T.O.) として、かなりの段階まで道路設計をまかされているが、先進諸国で一般に用いられているやや高度なレベルの技術まで、上司である白人が十分に懇切丁寧に教授してくれないのが不満のようである。

また同じ訓練生でも、数人がカナダ、イギリスへの留学出来る資格を有し

ながら、留学までの一時期をJ O C V や白人の仕事を手伝って過している。

〈マラウイ人の不満〉

実際に職場に勤務しているマラウイ人の技術者としての不満は、よく耳にするところであるが、それは一体何か。確かに上司らが、政府に勤務している Secondary school を卒業して間もない、マラウイ人に対して、土木設計を安易に任すことが出来ないのは、マラウイの国情はどうあれ、出来ない相談であろう。

しかし彼らは彼らなりにトレースの仕事をする度に土木構造物というものに理解を示し、少しずつでも興味をもち始め、図面に表現された意味や記号の伝えるところを勉強しようとする。ところが何年経っても、決してトレースという仕事から遠い上がることが出来ないと悟ると（もちろん昇級はする）最終的にはやる気を失い、つまるところ金銭のみに執着を覚えるようになる。生産的なスタッフは、それでも、彼らが設計に従事することを何が阻んでいるかを考え、それを満たす資格や学位を取得しようと努力する。

この国で労働について特に言える事は、生活の糧としての部分が大部分を占めているということである。つまり、金銭的要求を満たす仕事かどうか最終的な就職の決め手になり、仕事の内容とはほとんど無関係に決定される。職に就いている事自体が、彼らの生活を保証する証しとなる。裏返した例を掲げれば、office にいて、ただ時間を無駄に浪費していても、給与は必ず貰えるので、全く仕事に関心が無くても、生活してゆけるのである。

この比重は先進国になるほど少なくなり、仕事それ自体への関心が深まると共に、より高度な内容の追求へのウエイトが増大してくるのではなからうか。

ヨーロッパの白人らから全くといってよいほど評価されないという、皮肉を込めた、あからさまな表現なのだろうか、office でも自分に関するもの言葉を換えていうならば、自分が興味を持っていたり、即利益をもたらす種類の仕事や作業には驚くほどの熱意を持って取り組む。本来の仕事をおいても、近い将来、外人部隊の肩代りをしようという意欲に燃えて職場で勉強している態度から、彼らの将来の国家建設への焦りが感じられる。

マラウイ人自身が、国内で行なわれている業務内容を理解できぬままにして、数年後に一斉に各国技術者が引き揚げてしまったら、一体、どのようにして、この業務運営をしていくのだろうか。

各種設計データがどこに保管されているかも知らず、その数値的根拠もわからぬまま、放り出されたとしたら、全く、お手上げになることは、火を見るよりも明らかである。

それまでに一人でも多くの中級クラスの技術者が、外国人技術者に付きながら同じレベル近くで仕事をしていれば、この問題は少しでも解消されるのではないかと思えてならない。

とにかく、あくまでも外人は臨時雇いであり、これから数年後は、総てマラウイ人が行なうのだという彼らの気持をくみながら仕事をすることが、彼らの不満を解決し、同時に彼らの仕事に対する意欲として跳ね返る事を十分に意識してかからなければならぬだろう。

〈協力隊員の位置付け〉

1978年8月現在、設計部門には5名の日本人が勤務している。JOCV隊員の関与している仕事は、主として上司から手渡された設計に必要な基礎的データ(測量に基づく計画路線、都市計画図、建築物の一般図等)を基に、設計計算及び施工の為の基本図面の作製である。

現在、実際に設計に携っている技術者数は上司が道路設計2名、橋梁設計2名、構造設計1名の総勢5名。これと同数のJOCV隊員5名の合計10名である。それゆえに隊員の比重は決して軽いものではなく、設計業務では、かなりの責任を負っているのが現状である。

〈スペックの問題〉

建築構造物に関してBritish Standard(示方書)を基本に設計が行なわれている。その示方書は大きく分けて鋼構造とコンクリート構造の2冊より成り、コンクリート構造については日本におけるコンクリート標準示方書等とほぼ同格であるが、後者に比べると、やや大まかな規定になっている。図面の表記方法についても、根本的に日本の土木製図基準と異なるものが多い。また経験的、感覚的に表示方法が違うのにも、少々戸惑う事がある。鉄筋表示にしても、日本の図面が1本1本総ての本数の鉄筋を描くのに対し、英国のは、代表的鉄筋1本を描き、他は、数字で処理するといった具合である。国民性によるのだろうか、日本の設計図面は精密で懇切丁寧だが、英国の図面は、シンプルさが重要視され、可能な限り各数値が省略される。

道路設計に関しては、最近、当設計局で改訂されたHighway Manualが常時利用されている。この基準は、米国のA.A.S.H.O.(American Association of State Highway Officials)に準拠して作製され

ており、同じA.A.S.H.O.を参考にした日本の道路構造令はそれと並行する形で使用され、各設計根拠の参考図書として用いられている。詳細については当局で用いられている示方書と日本の示方書が大差ないので、マラウイにおいても後者は有効に使用出来ると思われる。

単位については、インチ、フィート、ポンドからセンチメートル、キログラムと混用されているが、英本国からの影響で次第にメートル法に統一されようとしている。建築構造物に関する限りでは、最近、国際単位（I S）のニュートンが用いられる傾向にある。

II マラウイ人との接点

〈職場において〉

我々の職場である設計部門は、設計局3階の広々と開放された空間に旧式の製図板が所狭しと配列され、日本のofficeとさほど変化はない。その上マラウイ国内はもちろんのこと、協力隊派遣国の中でも珍しいほど、同職種（土木設計）の日本人が同職場に、しかも一かたまりになって勤務しているという特殊環境でもある。当然、上司と仕事の説明や検討事項と思われる問題について、一言二言、英語をしゃべって、後は日本語の参考書やスペック（示方書）を利用して隊員同士で補足し合えば、大体の仕事のメドは付いてしまう。

あえてマラウイ人との接点を見出そうとすれば、我々の作製した図面を彼らの手を煩わせてトレースを頼むくらいである。無論、トレースを不必要とする図面を描けば、専属のトレーサーや留学持ちの訓練生は手持ち無沙汰になり、全くマラウイ人不在の設計局になってしまう。

一方、現在の我々に実際に課せられている仕事内容は、上司とほぼ同程度の専門家的技術能力であるが、見方によっては、マラウイ人の技術的協力者も無く、ただ黙々と業務を手早く仕上げなければならない中級設計技術者に過ぎず、日本からマラウイへ送り込まれている低賃金労働者の感がないわけでもない。しかし、こういう職場の行政システム上の立場を充分理解し、職種あるいは職場上の理由から（ボランティアという身分の性質から）逸脱する部分があるにせよ、ボランティア協力活動に何かしら主体的にかかわってゆこうとするならば、この板挟みにも似たジレンマを打破する方法が見つけられるのではないかと考えている。

〈J O C V のかかわり方〉

設計局に隊員が派遣されてから既に5, 6年の年月が経過している。各セクションにおける隊員は、マラウイ人の技術者不足を補うべく、現在では局内の重鎮となっていることは、誰も否定しない事実であろう。しかし、この期間中に、格別J O C V 隊員の職場での位置や、その生み出している諸環境には何ら変化がないということを度々マラウイ人から聞かされる。同時に仕事上での白人と日本人の上下関係は依然として続き、マラウイ人との関係も、それほど改善されているとは思えない。

我々が技術的にマラウイ人よりやや優れているとはいえ、彼らにとっては多くの貴重なポジションを占めているのに、日本人に何一つ不満を漏らさないのは、我々が日本政府から直接金銭的援助を受けているからなのだろうか。この数年間は、マラウイ人にしても、1964年の独立後、各分野において暗中模索しつつ自分達を取り巻いている状況をゆっくりと観察するゆとりをもてなかったかも知れない。それ故か、J O C V に対しても、ある程度、理解する時間が必要であったろう。

しかし、これからは第二段階として、マラウイ人自身が自らの手で国家建設する時代であり、技術者も増強しなければならない。だからJ O C V とも何らかの形でかかわってゆき、我々から摂取出来るものは、何でも吸収しようとする態度が、随所に見られる。当然、隊員である我々も、それに対応出来る能力を課せられるであろう。進んでいるいろいろな形で協力支援しなければならないだろう。従来の仕事をテキパキと片付ける隊員よりも、少々仕事が渋滞しても、彼らに有形無形の技術が残るように指導する必要性が出てきたようだ。

〈相互隔離〉

同じ職場にいながら、その仕事の性質からか、英国人、日本人、マラウイ人とグループが歴然と分離しているのには一抹の不愉快さと淋しさを感じる。その理由の一つは管理する立場と管理される立場に大きく分けられるからで、日本人とマラウイ人は、後者に属する。先進国社会では、近年、どの職場でもお馴染みの上下関係ではあるが、特にマラウイ人のように被植民地人種にとっては、問題は、それほど単純ではないように見受けられる。

我々にとっても、従来からいわれている西洋指向、西洋コンプレックスが多少なりとも影響しているのか、上司が白人ということで、絶えず彼らの目を気づかいながら仕事をしている節がある。これは先進国の管理される者の

心理でもあるが、上司の指示に沿って仕事をスムーズに遂行する為には、むげに否定出来ない事実である。

しかし、仮に、我々が職場のマラウイ人に、このような管理する立場の視点に立ち（職場における位置から時々このような状況に遭遇する）、言葉にこそ出さないけれど、態度やその仕事で日本で通常行なわれているような合理的な体制を押しつけ、前述した態度に彼らを追いやるようになったら、どうであろう。いつも私が危惧しているのは、実は、この点である。

もう一つは言葉の問題であろう。協力隊員が入った為に、英語、日本語、マラウイ語を使う三つのグループに分断されてしまったというのは、もちろん少々短絡的であるものの、事実、英語圏のアメリカのピースコーが勤務していた頃でさえも、マラウイ人らは、彼らのスラングの多い会話には馴染めずに、ある種の断絶を感じたというくらいである。単独で勤務している日本人ならば、両者に与える影響はさほど大きくはないが、複数になると、自国の言葉をいやがうえにも使おうとするので、必然的に、このような分離現象が起きてしまう。

母国語以外で第三者が雑談していて、ある程度の単語から推測して、自分らが話題にされているというのがわかるのは、良きにつけ、悪きにつけ、互いに気分の良いものではない。我々が毎日している些細な会話から、今まで築いてきた友好関係にひびが入らないとも限らない。この点に関しては我々の職場の特殊性を考慮して、十分に注意しなければならないところだろう。

Ⅲ 中間土木技術者の養成について

過去数年の派遣実績がある設計局に於ても、旧態依然とした状況であり、これからの日本人ボランティアの質的向上をはかり、かつまたボランティアを最大限に利用してもらう為にも、上記事項について一つの参考意見として報告する。

これはこの1年間に体験しながら感じたり、現場のマラウイ人の意見を参考にしたものである。もちろん、これが机上の空論で終わってはいけなく、あくまでも行政機構や教育方針をコントロールしているマラウイ人自身に委ねるべき問題であるが、これから設計局に送られる人々に何らかの参考資料となれば幸いである。

〈現行土木技術者誕生システム〉

希少価値の土木技術者がマラウイではどのようにして誕生しているのか。

ここでマラウイの教育システムを簡単に紹介しておく。

Secondary school を卒業する時に受ける全国共通試験により、それ以後の進学コースが決る。この試験は英語、フランス語、物理・化学、歴史、地理、数学、等の6教科から成り、各学科ごとに最高1点から最低9点までのランクで採点され、総合点で判断される。この総合点が6(満点)~21点まではhigh school へ進学出来る Certificate が授与され、21~30点まではCollege へ、30~34点までは Teachers training school へ、それぞれ進学することが出来る。High school へ進学する学生の多くは、卒業後、英国等の大学でさらに専門課程を履修する。

College に進める Certificate を取得した者は、ここで3大学への選択の道が与えられる。いわゆる文科系の Chancellor College、工学系の Polytechnic、農薬系の Bunda College である。土木専攻課程があるのは Polytechnic で、この他に電気と機械学科が設けられており、各人が自由選択できる。この3学科で総勢30名余りであるから、正規の工学的教育を受けた者の数は本当に僅かである。

Chancellor College は4年でDegreeが取れる。Polytechnic は3年でDiploma、Bunda College は3年でDiploma、4年でDegreeがそれぞれ取得出来る。DegreeとDiplomaは学位であるが、修業年数により呼称が異なっている。

これを修了すると、政府機関や大企業へと就職する。共通試験等、不幸にも途中で落伍した場合、学歴をつける手段として通信講座があり、主としてローデシアや英国のものが多い。Diplomaコースで約150クワチャ、Degreeコースで200クワチャである。しかし、通信講座で取得した学歴がマラウイ社会で上述の3大学と同じ程度に正当に評価されているかどうかは、はなはだ疑問である。

〈留学生に関連して〉

人口500万人の国家に於て、ある特定業種の人員を増加させようとする試みは非常に困難である。当局におけるマラウイ人で5年以上ここに在働しているものは、技術者に関する限り局内の10%にも満たない。そして業務経験が長いにもかかわらず、実質的な仕事は日本人以下の単純かつ容易なものに限定されており、彼らの熱意を欠かせるものである。その上、残り90%は国の差異こそあれ、これから留学しようとする者であり、その業務内容は留学までの一時渡ぎの仕事である。しかし、その良否は我々が口を差し扱

むべき問題ではない。

高卒程度の、土木工学を履修もせず入局したマラウイ人は、学歴こそ留学組に劣るものの、その長い経験から、ある程度土木知識もあり、その上に設計意欲のあるものに対して、もう少し指導、助言が出来ないものかと残念に思うのである。確かに、留学しようとする者に設計業務の手順を教える事は理解が早いので容易だが、場合によっては、基本的事項から説明しなければならず、かつまた、彼らが、いつ留学し、いつ局に戻り、実際にどんな設計に携わるのかも明確でなく、各分野（測量、土木試験等）を体験させる為に転勤が頻繁にあるから、勢い彼らを指導するのに消極的になるというのが、大方の日本人ボランティアの心理である。

現在の行政システムの中でボランティアとして働きながら指導することは勤務中は自分の仕事に忙しく、なかなか難しい。仮に可能でも、我々が留学生以外のマラウイ人を指導するとすると、上司の意向とも必ずしも一致せず、なかなか問題である。

〈現場における養成〉

上司から受け取った仕事をマラウイ人の一部に委ねて、一緒に仕事をするということも、潜在的にマラウイ人を信用しない上司にあっては、なかなか難しい。そういう体制が作られたとしても、誤まりがあればもちろん我々の責任になるので、最終的には自分で彼らの設計をチェックせねばならず、二重の手間になる。しかしボランティアとして、設計技術者を本当に一人でもマラウイに増やそうとすれば、その程度の手間は回避してはいけないと思っている。

しかし、仮にそういう努力を2年間したとしても、一人か二人の設計技能者しか生まれず、隊員が帰国してしまえば、その知識が教養程度に備蓄されるに過ぎず、えてして他に葬られてしまう懸念さえある。我々に出来ることは、とにかく何らかの設計業務に興味のあるマラウイ人に対して、勤務時間外にそのイロハを教える他に手段がないように思える。しかし、これでさえ、相当の効果が上がるなどとは期待出来るものではない。しかし簡単にはゆかないかもしれないが、それを少しでも職場で使いこなせれば、その理解も深まるはずだ。設計においては、机上の勉強に優るとも劣らないくらい、実設計が最も重要なプロセスであるからだ。

現在、もう一つボランティア側にかかわる問題として、日本人グループでの仕事がある。大型プロジェクトになると、3、4人の日本人が互いに手

伝って分業で仕事を進める。日本のスペックを参照し、相互に意見を反映させながら協力してやるので、当然仕事はスムーズに進行する。しかし、ここで注意したいのは、全くマラウイ人がかかわっていない点にある。彼らが全く設計にタッチできないから、我々の残した設計資料の保管も日本人が行なうという全く奇妙な現象が長年続けられている。こういう事態を考え合わせて当局への日本人の増強には、これからは付加的条件をつけながら派遣しないと、いつになっても協力隊の意図する目的から大きくかけ離れる懸念があることをあげておこう。

これを打破する方法は、やはり、マラウイ人と一緒に仕事をする、あるいは、遂行出来る機構を生み出すことであろう。今までも決して一体となってやっていないわけではない。しかし、残念ながら、その各々の役割りが完全に分離しているのである。

もちろん、教育課程及び経験の差が充分にあることを認めているので、我々と同一舞台で、同一業務を早急にすることの難しさは決して否定しない。しかし現在数年が経過していることを考えれば、そろそろ後継者づくりという構想を考えてもよいだろう。時として立派な後継者を残しても、隊員が帰国して一代目はよいけれど、やがてその仕事能力ゆえ業務に忙殺され、自滅する場が多いことは、過去の事例が多くを物語っている。

しかし幸いに、当設計局には日本人が常時5、6人ほどおり、マラウイ人の協力者として各一人ずつでも共に仕事することで、点的存在の大型技術者を残すことから、線的存在の中間技術者を残すことが出来るようになるのではないだろうか。いくつかの分野で中間技術者を少しずつであるけれど増大することで、ある程度の技術者拡大がはかれるのではないだろうか。一口にカウンターパートといっても、難しいことは事実であるが、隊員にとってもマラウイ人にとっても、それによって少しでも現状が改善されれば良いと思う。

〈結びにかえて〉

日本でさえも、今日こそ、土木に関する各種専門学校があり、各大学が土木工学科を持ち、毎年数多くの技術者を輩出しているが、それまでの道程は決して容易なものではなかったであろう。同様に、前述したことはマラウイの行政レベルの問題であり、無責任に批判したり、コメントすることは避けるべきであろう。しかし、我々の現場の現状を見て一つの意見として希望的提案を述べれば、次のようである。

技術的に技術者養成をするには、日本の工業学校に相当する専門学校を一つでも二つでも建設して、基本的知識をマスターしてから職場へ送りこみ、実設計を手伝いながらトレーニングを積んでゆく方法が、普及効果速度は遅くても、結局は好結果を生み出すのではないだろうか。隊員が各種専門学校の教師として各部署の基本的パートを担い、一方実際の設計局には専門家が入り、あるいは協力隊員がカウンターパートとして、さらに技術向上に援助するという二段方式が、一つの方法ではなかろうか。しかし各種専門学校建設は予算をはじめとする諸事情で、それほど早期に実現されそうにもない。逆に考えれば、実際には我々が心配しているほどにはマラウイ社会が技術者養成のニーズをもっていないのかも知れない。だからこそ我々が日本的センスで批評家になるよりも、少しでも現場で行動して、実績を足跡として残した方がよいのかもしれない。

付記：業務内容

1978年5月から8月まで設計業務として取り扱った物件は下記の通りである。

(1) Bwengu-Rumphi Road

前回レポートしたもので、工事がすでに着工されているものの変更が相次ぎ、縦断線形の再検討修正、それに伴う土量変更に約2ヵ月ほどかかった。

(2) Malawi Army Training School

(Sergeants and W. O's Mess)

サリマ (Salima) に新しく建設する軍事訓練学校で各種構造設計を行った。

- ① 2階宿泊室 ($28m \times 12m$) の床版設計 (厚 $13cm$ 2方向性版)
- ② 正面玄関テラスのスラブ ($6m \times 5m$) (厚 $13cm$ 2方向性版)
- ③ 各種階段の詳細設計
- ④ 渡り廊下の張天井スラブ (巾 $1.5m$, 厚 $13cm$) 及び梁の設計
- ⑤ 正面玄関のスラブを支持する柱の設計 ($23cm \times 23cm$)

今、協力活動について考えること

後藤 和正

1. 派遣にあたり

長い間、「海外」とか「海外派遣」という言葉のイメージに、漠然とした憧憬を抱いていて、偶然に協力隊というものに出会った人も少なくないだろう。私も、そういう仲間の一人であった。

さてそれが、現実に関前に据えられると、今までの憧れが一挙に吹き飛んで、一抹の不安を感じたものだ。海外での協力活動に参加するという事は、自己の胸中で十分に煮詰められたはずの決意であったから、突然に首をもたげてきた不安感に、正直戸惑ったものだ。

それは、未知の生活に対する恐れであったし、その重責を帯びた仕事への精神的な圧力からでもあった。

以前から生半可な「憧れ」だけでは務まらないと、常々自戒してきたのだが派遣国で困難な場面に遭遇するごとに、つくづく、この事は肝に銘じてかおなくてはならない、と感じたものだ。

確かに、その不安感は、任地の状況を前もって押し込んでみても和らぐものではないし、現地に降り立ってみると、耳学問したことと相違点が多いものだ。自分の視覚でありのままを観察し、受け入れてみようとする意欲をもって出かけてゆけば、案外上手にゆくものだし、カルチャーショックも少ないものだ。

要は、異なった環境に適応出来るようなフレキシビリティを養成しておくことが、2年間の生活には大切なことだろう。

2. 現地にて

協力隊の「奥地前進」のスローガンの下にあらゆる協力活動が集約されているという安易な考えで、現地へ出向いてゆくと大抵失望する。特に都市型隊員として日本人集中地域へ派遣されたりすると、こんな環境で現地の人々と一体感を味わえるのか、言葉が上達するのかと愚痴をこぼしたくなるものだ。しかし協力活動の目的と手段を明確に分離して考えれば、自己を納得させることは容易なことだ。隊員の生活環境は千差万別だから、与えられた状況で、どのよう

に自己を生かすかは、まさしく巨視的な意味で隊員に求められる「順応性」なのだ。

3. 職場にて

任地で働くといっても、つまるところ日本と同様、組織の一員として活動するのであるから、仕事で上司との信頼関係を得るのも、日本とプロセス的に変わったことはない。

簡単な仕事でもきちんとやり遂げることだし、初めての仕事にも積極的に取り組む姿勢を示すことだ。日本ではあれもこれもとやらせては貰えないが、開発途上国に於てはこの点非常に柔軟だから、やる気さえあれば随分と幅広い仕事に携わることが出来る。

それは開発途上国では隊員のポストが相対的に高いことにもよる。だからといって、自己管理をしっかりしないと、時に日本の職場では考えられないような甘えた行動に走ったりしてしまう。それは先進国と開発途上国との間に優劣を付けて考えている思い上がった先入観があるからかも知れないが、敵に慎まなければならない。

常識的な価値観は国によって雲泥の差があるというものではない。日本で大方通用するルールは、概して受け入れられるし、反対にそうでないものは、やはり拒否され、翠燈をかうものだ。

4. 帰国して

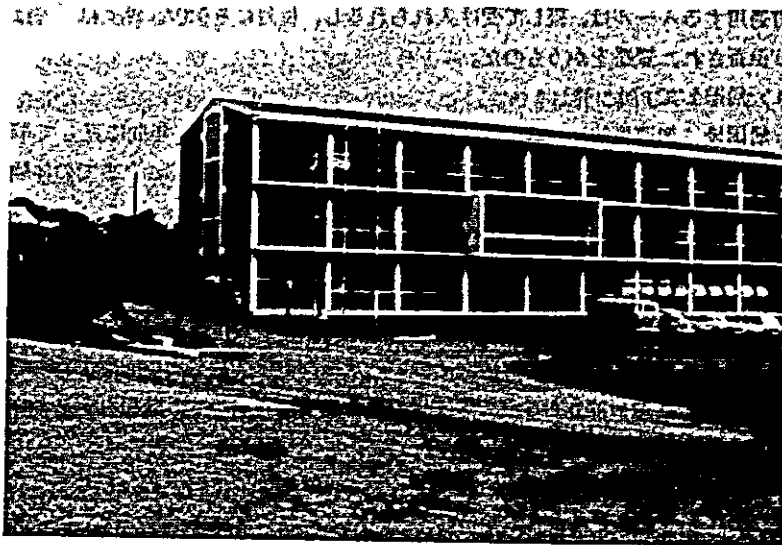
帰国後、加速度的に日本の社会に融和されてゆくに従い、2年間に亘って脳裏に刻み込まれていたはずの思い出も、その鮮明さを失ってゆく。今までの体験を反芻し感傷に浸っているほどの時間的余裕も見つけにくい。

それどころか、意気揚々として派遣国へ出向いて行った時よりも、日本の社会で再スタートをする時の方が、精神的にも肉体的にも厳しい状態に置かれることが多い。それを克服するだけの底力を2年間のうちに貯えておくことも必要である。「厳しい選択」とは、そういう意味で、協力活動だけに対するものではなく、派遣前はもちろん、帰国後の再出発までを含めて、参加をする前に熟慮すべき問題である。

近頃は新聞を眺めていても、何気無くアフリカのニュースを捜してしまう。それだけアフリカが身近に感じられるようになったのだろう。ただ、そういう内的関心に終わらせることなく、広くこの貴重な体験を伝えてゆかなければならないと思っている。

世界各国で営まれている人々の真の生活の姿を互いに理解することは単一民

族である日本人自身の意識変化をもたらす為にも格好の機会になると思う。そういう人間社会の変革の媒体として、少しでもこの体験を役立たせることが、我々の今後の務めだと思っている。



Design department の建物——
3階がDesign sectionでありJOCVの
隊員が各種設計に従事している



マラウイ湖の中にあるリコマ島の高校生ら。
全寮制になっている

後藤隊員の報告書を読んで

坂本 健次

現在の土木部門においては土木設計、土木施工の2職種に分けて協力隊員の募集を行なっているが、派遣要請国の業務内容をみると、このようにはっきり分けることに無理がある。どちらの職種も含まれており、時には建築、農業土木等の他分野に属する職種までも含まれている場合がある。したがって協力隊員の選考にあたっては、技術的な面では深い専門技術はあまり必要なく、ある程度の基礎的な技術があれば、それをいかに応用することができるか、という応用問題に強い人物が要求されている。

本来土木技術は人間の生活に密着した技術であり、人類の発達と共に真先に誕生した技術である。土木技術から細分化され、派生していった専門技術も、かなりの数になっている。

したがって土木技術は多分に総合技術としての要素をもっており、それにたずさわる技術者も総合的な判断力を要求されるものである。

協力隊活動における土木分野の業務内容であるが、業務内容がはっきりしており、業務の進め方に対する組織もすっきりしているケースは少なく、内容および組織もあいまいなケースが多いようである。極端な場合は協力隊員が、何を、どのようにするかを自分で決めなければ、何もすることがないというケースもあるようだ。

後藤隊員が派遣されているマラウイの工業補給省設計局のケースは、土木部門の隊員派遣先の中では特別な部類に属するケースである。すなわち組織がはっきりしており、業務内容も分業によってはっきり分けられ、デスクワークが主でフィールドワークが少ない。内容的には日本国内の仕事とほとんど差のない仕事といえよう。したがってマラウイのケースでは、隊員活動を始めるにあたって、まず何をしたらよいか、という悩みから出発することはないが、次の段階で自分の業務における役割について疑問をもつのは、後藤隊員を始め多くの隊員が指摘しているところである。つまり仕事の流れにおいて、自分の立場上の役割を円滑に行いさえすればいいのか、自分の役割を徐々に現地人に

移管していくアクションが必要なのかという問題である。

協力隊活動の中で、現地人を教育指導（土木部門において）することが重要な要素になっているのかについては、理想と現実との間で意見の分かれるところであろう。しかし現実には、そのような業務を重視するかどうかで協力隊員の選考基準まで影響を受けることもありうるであろう。

ただ土木分野に関しては、現地人を教育指導して協力隊員の役割を移管していくことはなかなか難しいような気がするし、よほど特別な恵まれた条件の場合でないと、成功しないと思われる。したがって現状においては協力隊員各自もある程度割切って考えていけばいいのではないかとと思われる。（青年海外協力隊技術専門委員＝土木設計）

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありました。が、隊員の活動を広く紹介する観点から、今回は国別編とし、昭和54年度、55年度の2カ年で全派遣国編を完了させる予定とし、その後、順次、違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種の配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど、不十分な点もあろうかと思いますが、とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見、ご提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書集のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力いただき、報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

昭和55年 3月

啓発課長 高橋 成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録〈マラウイ編〉

昭和55年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

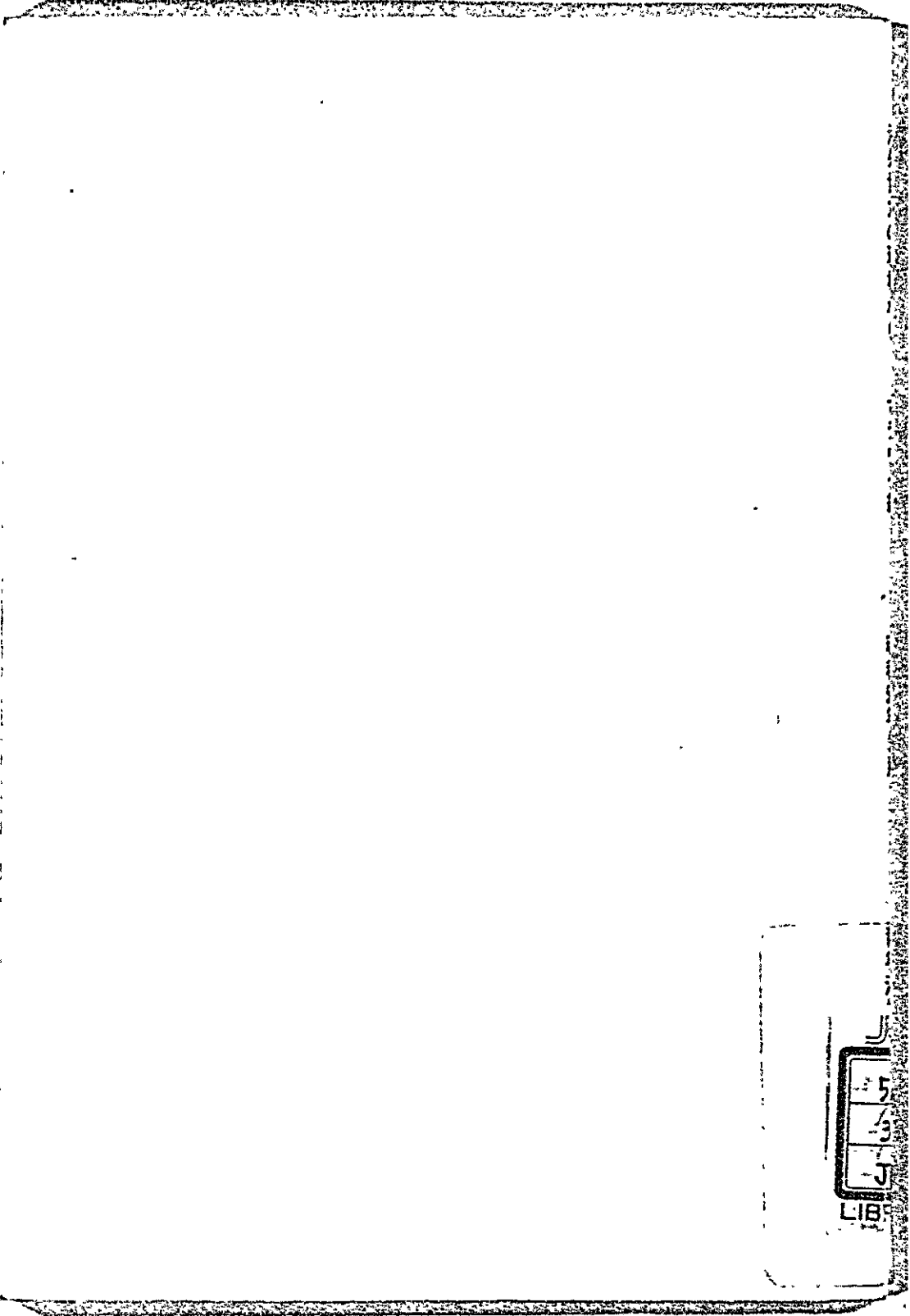
発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261(代)

印刷所 株式会社 東 神 堂

〔非売品〕



5
3
J

LIB